

まこそ見えないが、十年ばかりも前までは、農家、漁村の人の、雨に雪に城下へ出る時は、かりでなく、町の學生が好んで使つたものでも。——勿論、脱いで居る、が、笠には、まだ雪が残つた。

この男が、酒店へ入つたのは、阿闍梨親仁よりは少時先だつたのである。が、早く雪を消すほどの暖を取る設備もなし、酒もまだ寒さを凌ぐほどには廻らない。

戸外は、さつ／＼、さつ／＼と雪が降りしきる、そして節分の夜なのである。

——處で、場末ではないが、一棟、神社のある裏町に、雷燈も餘り明るくない、この酒店は、小體にしろ、何にしろ、當節のバーでもなし、例の居酒屋で一せんめし、あり合お肴と言ふ趣があるのでなかつた。筆者は、實地はもとより、道中の繪で見ても、話で聞いても、軒に鮭の脚の一まきまいて掛かつた景色はすきである。酔にしてキユツと嘔みながら一升熱い處……こ來ると場が引立つ。——この話をお取次するのにも、はじめ聞いて、寒い國の雪の中の酒屋だと言ふから、湯氣の立つ紫の疣々へちらく／＼雪のかゝる處か、

……中へ出る人物が中毒らうと中毒るまいと、そんな事は構はない……河豚鍋を掛けさせやう。せめて鮫鱈鍋でもこ意氣組んだが、然う言ふお説へには行かないのである。

雜言へば、酒の取次をする荒物屋で、近頃ほんの出來心で、土間の板敷を拂つて、眞似ごとと同様に、一二脚、腰掛椅子を置いたばかりであるから。——「入らつしやい。」——

などと言ふ景氣も更がない。別嬪の姉さんが居て、酒屋の癖に、何うも陰氣で……

第一菅笠の男が門口へ立つた時は、まだ宵の口だと言ふのに、——新屋とかいた二枚の腰障子も、びつたりと閉つて居た。……午すぎからちら／＼降り出したので、白いものはまだ然まで濃しくもなかつたが、門なみに戸の閉つて居た事は言ふまでもない。

三尺ばかり間を置いて、つくねん笠を傾けて立つたまゝ、破目はあるのに、うそ／＼と覗きもしないのは行儀が可かつた。其の癖、おなじ處に立ちながら、後さきを、特に今來た一方に、——横に鳥居が見えて神社へ入る——四辻の邊を氣にしては見返つた状は、あとを追はるゝにしては靜か過ぎる。……人目を忍ぶらしい様子があつた。……と言へば

色戀の床しきがある。が、實はさうでない。——菅笠が、こゝへ、其の辻を來かゝると、足許から鳥が立つと言ふ諺はこの事で、薄く敷いた雪の上を、ばさく／＼に鳴つて、一歩ひく裾へ搦まるばかりに躍つたのは、何處の物置から掃出したか、掃溜を犬が啣へ出したかと思ふ、筋骨立つた、すた／＼の澁團扇で、諺がもう一つあれば、貧乏神に魔が魅したやうであつた。

追はれるやうに、躑はすやうに、恚う爪立つやうに、二三度、うろ／＼に成つて、すつと出る／＼、風の加減か、裾へはつかず、おなじ處を、くる／＼に舞つて、骨がばさ／＼に鳴つて居た。新屋の燈は、もう其處までは届かないが、妙に、其の澁團扇の影を氣にしたのである。

で、何うも、澁團扇を氣にするやうでは、大概人品の度合も知れたと、先づこゝで言つ置く。

處で、腰障子ががた／＼に開く／＼、頭から眞黒で、眉の上へ、嘴のやうに廂の突出た坊

主合羽いふ奴に、すぼり／＼包まつた少年が一人、「……行つて來ます。」と威勢よく飛出す。「……」氣をつけてね。「……」恚う帳場らしい處から、片袂おろしながら送出したのが……櫛の卷美しい其の婦で。

早い／＼少年はもう四辻の處に居て、「やあ、こん畜生。」といふのを、姉か、其の婦が、「悪戯をしては不可せんよ。」と一寸寒さうに袖口を折込むのに、薄紅がちらり／＼して、戸口から其方を覗いた。

犬も、猫も、何にも居ない——少年は、捨團扇の化けさうなのにからかつたもの／＼見える……。

片暗へ身を引いて居た若い男が、其處へ、ささ／＼雪の音、班に白い菅笠を、沈めて出した。「旅のものです、一杯頂けますか。」變な風體を、別に怪しむ様子もなかつた。或はこんなのが此店には相應はしいのかも知れない。「はい、さあ、何うぞお入り遊ばして、で、帳場からすぐに二階の階子段の見える土間の一方の椅子に掛けた。婦が、呵嚙にお仕置を

して——小賣に酒を取次ぐかたはら、ほんの一升、硝子盃幾つこ、お間に合はせをして居ました、店でさしあげますやうに心掛けましたのは、つい近頃の事で、まだ何にも間に合ひませぬ。お盆でお給仕をしますほどの支度ありませんけれども。——結構です、結構です。——餘りお寒うございますからお爛だけはいたしません。それでこふしやう遊ばすか。——結構です。結構です。——やがて、ほッほッこ、盃を呑むやうに、白い息の中へ焼爛を立てつけて、さてお肴は？……鯛をむしりますほかには、水菜と鮎の煮ましたの。……いま、あの少年にご飯を食べさせて出しました。私どものお菜がございます……お厭でなくば。——至極結構です。が、旦那の分がなくなりはしませんか——あれ、お人の悪い……こ、ぼつこ、顔を紅くして、——そんなものは存じません、一寸姿を曲つた處は、慙うは見えても酒を賣る姉さんらしい。が、深切に、一度鍋に掛けて、暖めなほして盆で出した小鮎と其の水菜の煮つけ。

土間を鍵の手に廻るこ、階子段の裏あたりで、やがて、ちやぶくこ水づかひ、チヨキく、チヨキく、粗でものを刻む音がするのを、菅笠の男は、椅子から遠まはしに差覗くやうにしたが、其處は暗い。店の燈をほのかに借りた、馴れた水仕事と思ふにつけても、あの露出した二の腕の色の白さが惚ばれる。

目を天井へ外らした、が、熱い障が寄つて眉が迫るこ、推伏せられたやうに内向いて、彼は何故か、ほろりこした。

婦は襷がけのまま、大根の浅漬を——こんな、ぶしつけなものを、お氣味が悪うございませんでしたらめし食つて——これは何より結構です。こ箸をつけるこ、此の邊の仕來りで、部厚に切つた薄皮を一寸残して、縦横に浅く庖丁目を入れたのが、菱形に目を持って、箸に掛つて、箸に干した網のやうにさらりこ上る、うつくしい人の袖口の影に、白魚がこぼれさうである。

切るのも惜い。——お手際ですぬこ、箸を置いて、失禮ですが、一つお酌は願はれますまいか。え、こんなもので……飛んでもない。不調法ですけど、襷をはづして銚子を取

つた。——お店は新しいやうですが、いつ頃から。はい、あの、……—

——火の用心、火の用心——火の用心——

あゝ、珍しい。……今夜は節分、おん厄はらひませうな厄落し、厄拂のかはりに、雲の町に火の用心を觸れるかと思ふ聲が、三つ續けに聞こえる。お辻——やがて名も知れて居た——お辻はぞつこしたやうに、胸を伏せた。

——火の用心、火の用心——

のぶこい、鍛枯聲が、すぐ戸口で。いきなり腰障子を開ける。毫碌頭巾に、網代笠を頂いたのが、雪の中から小鼻ミ大疣をぬいと覗かす。同時に消えたか、消して来たか、灯のない件の提灯に、あかさの太杖を持添へて、片手にはさくの溢團扇——此は誰が目にも、四辻を飛び廻つた其と知れる——を被布の袖下りに握つたが、掬くふやうに煽つて、風音を立て、

「火の用心、火の用心。……用心せい、用心せい。」

「あれえ。」

けたゝましいほどに、お辻が避つて、

「可厭ですよ、阿栗梨様。」

「まあ、可がな、可がいな。」

「可厭ですね、不可ませんわ。」

「何。」

と、聲に尻角を立て、

「入つては不可んと言ふかい。飲んで不可んと言ふかい、飲ませんと言ふかい。」

と言ひ、既にづしりと腰を掛けた、これは店口正面の一脚であつた。

「そんな、あなた、……お酒の事ではないのです。その團扇なんですよ。」

「おゝ、うちはが何うしたかい。」

と忽ち生ぬるい聲をする。

「あの、今夜は節分ですし、……厄落しに思つて、それを前刻うつちやつたのですのに……」

「はあ……いかに、厄落し。——中にも、火の厄、火難を落さうとしたのぢやらうがな。」  
「え、此間から、あなたが幾度もお話しなさいます、もと、こゝの家は、節分の晩には、いつも火に祟るこおつしやるのが氣に掛つて成りませんのですものね。」

餘所見をして居た若い男は、お辻の此の言に、衝きみひらいた目を注いだ。

「姉ま——こゝの家は、——その、こゝの家はぢや、……人によつては、ほつかりと煙を、して飲ませるこ見えるぢやな。」

こ、注いで出した硝子盃の冷酒を、數手で握めてぢろりこ視る。

「でも……いつでも、あなたは。」

「いや、可い。……神棚、佛壇に燭をした酒は供へぬ。尋常のものとは違ふぞよ。へ

ん。」

こ若い客を流盼に掛けつゝ、

「お神酒は冷くて大事ない。ぢやが、此の節分は大事ぢやぞ。お身は此の店で三代に成るが、はじめの家では、三年續けて節分の夜と言ふと火沙汰があつた。なれどもな、一家信心が深かつたに因つて、懸命に守り通して、何うやら自火は出さず、焚けずに済んで。——四年目が、あの大火事ぢや。その時、貫火で焚けたわい。とに角火の難はよう免れなんだぞ。何うぢや可恐しかる。——四五年空地に成つて居つて、いまのこの家をやうく建てたが、其の初代の主人は立春を待たずに亡くなつた。……一家は他國へ離散した。——澤山の家族でもなかつたなれど、さて、行方は分らぬ。二代目はこゝに二年住んだ。その間、一度節分に別條があつたか、ないか、それは、ありやうは私も知らぬ。ぢやがの、落着いて住みおふせぬ處を見ると、餘り安泰ではなかつたぢやろぞよ。あとが此方ぢや——はじめての節分ぢや。——また丁度旅を掛けて、この節分のあとさきに、こゝに男手のな

いと言ふも氣掛りぢや。——なあ、姉ま。」

と、肩に陰氣な蔭のさす、お辻の不安らしい顔を視て、酒を吸ひさまに、唇をべろりこやり、

「真に一期の大事ぢやぞ。手過失があつてはな、わが家を焚いただけでは濟まぬが。……火元は七代まで崇られる言ふてな、……煙草火一つ——吸殻に風ばうく。」

若い客は、思はず喫みさした巻藁の火を隠して、下へ伏せた。  
お辻は見るこもなしに、氣の毒らしい、遺瀨のない顔をする。

阿闍梨親仁は、肩で押かゝる如く、嵩に乗つて、

「……または蠟燭一挺の怪我から、家も町も一舐めに灰にすると、可いか。——今は此の火あぶりのお仕置もなければども、世の難儀、人の迷惑、人の怨恨で。……此の邊では火元と言へば、その主人は先づ焼死んで言譯をするのが掟のやうぢや。あ、あ、可恐い事ぢやな、火の用心が肝心ぢやぞ。……用心せい、用心せい。」

「えゝえ、それですから、阿闍梨様。……些との事でも氣に成りますから、……」

お辻はわくくして、四邊を視ながら、

「その團扇を棄てたんですの。」

「ふーむ。」

「あなた、昨夜も入らしつた時。……猫の怨のお話をなさいましたでせう。——あの、大きなお邸で、氣の荒いお殿様が、盜賊猫の堀の上へ通げる處を、槍玉とかにおあげなさるこ、串刺のやうに成つて、ぐるくと尾を耳で廻つたんだつて、まあ、酷い。……三年目の猫の日には、屹とお邸が焼けるッて、未來も見徹しの豪い法印さんが心着けなすつたのでしたつてね。」

「私がお堂の先々代ぢや、鬚は長し、鼻は隆し、眼は光つて、活きながらの天狗、魔ものと呼ばれたお山伏ぢや。」

「お邸にも、氣になる事が續いた處だつたんださうでございますものですから。」

若い客の徒然を慰め顔に、こんな中にも氣あつかひの口を分けて、何を微笑むともなしに莞爾した、眞珠のやうな皓齒である。

「あの、其の日は、空家のやうに諸道具を片つけて、朝のうちから、火の氣もいつては、附木も置きませんで、あの、お佛壇の燈心さへ片づけて、番人のお侍ばかり、邸中を水にして冷く成つて居ましたのに——眞夜中でございますッてね……何十疊か、あの書院の眞中に居たお侍が、何うしても我慢が出来ませんで、内證の内證で、そツミ火打石で火をきつて、それを火奴に移したと思ふこ、——高い、廣い、暗い天井の眞中から、元結ほどの、白い、細い、紙のやうなものが、スーツと下つて来て、チラリとほくちの火をうつして、あれく、それが天井へ上つたと思ひますこ、一時に板の合せめから火を噴いて、それが猫又火事と言ふ、大火事に成つたつて——お話しなすつたんでございますもの。」

「其の通りぢや……」  
阿闍梨は小卓をハタと敲いた。

「もう私……煤が落ちててもびく／＼して居ますのに——今日お午過ぎころ、こゝの屋根の上で、猫の鳴聲がしますから、ハツと思ふこ、あの。」  
袖口がちらりこして、

「破風の窓に、何うして挟つたんですか、内ぢや見馴れませんか……その被團扇が挟まつて居たんですもの。——可厭でございますわねえ。……お邸の書院では元結ですけど、こんな家ですから破れ團扇なんですの。——夜だつたら何うしませう。——書間で、それに少年でも、あの子が居たもんですから、……畜生々々……猫か悪戯に啣へて来たんだと思ひますから……然う言つて、追ひますうちに、雪風が、ざあと向ふの山の方から通りますと、空が暗くなりましてね、山から落ちるやうに、破風をくゞつて、井戸のつひわきへ落ちたんですのよ。——この上、貧乏にしまして、火事にしまして、可厭で、忌はしうございますから、人顔の見えなく成るのを待つて、あの四角へ、厄落しに捨てましたのに、……阿闍梨様、あなた、また拾つてお持ちに成るんですもの。……何うしましょうね

氣に成りますわ。」

「たわけた事を。これ、私を誰ぢやと思ふ。立性院の岩膜ぢや。女子なぞの了見で察度をせまい。——これ、假にもな、その火の氣掛りのあるものを、町の辻へ投出して可いものか。——火を出すわ……な、それ、内から火を出す……事になるわい。」

「うむ、何うぢや。……あの四辻の雪あかりに此の溢團扇のめらく、こ動く體は、炎を噴くも同然ぢや。通りがかりに見たればこそ、私が掌の内にもちやこ納めて来た。——これとてもちや、凡人が虚氣に振れば、立處に火傷もしかねぬ。火を出すこ、納めるこは、大海の鯉貝の相違に成るぞよ。——心あるものはな、煙草の火でも、……火を出すといふによつてな。……」

若い容は舌打して、巻蓑を火皿に伏せた。

「いやさ、火をつけたまゝで、それ門を跨いては出ぬものぢや——さあ、もう一杯——私

なればこそ、此魔の魅した破團扇を、干鯨同然に扱ふが。……」

と、がふりと飲みさした硝子盃を、その溢團扇の上にのせた——その時までは、椅子なる膝頭に突立て、居たのである。

「はや、此でさへ爛をしたほどに、ふん、酒さへも暖もるぞ。團扇の火氣が擧るわい——それで何かな、猫が鳴いて、この團扇が覗いたか、破風をな。」

「白眼に、透間だらけの天井裏をさろりと睨んで、破風を團扇が覗いたか。……びら／＼と落ちたぢやな。——あゝ、それが、同じくば井戸の中へ落込む可かつたになあ。さてこそぢや、火の用心。今夜が大事ぢや、やれ、又雪を誘つて、さつ／＼と凄まじう雪が降るわ。」

町内前後を、人らしいものゝ通る氣勢もない。

「心細うございますこと——氣味の悪い……何うしたら可いでせう。こんなでしたら、あの子でも、出さないで置けば可うございましたのにねえ私……節分の豆に、お菓子も蜜柑



も交るし、あとで、お年越の歌留多をするつて、賑かなうちへ呼ばれたんですもの。……可哀相に、さみしがつて居ますから。……私だけで、心細いのを堪へたんですけれど……遠方ですから、遅くなつたら泊らなければ可うござんす……雪もだん／＼積りますし……。」

「姉ま、姉ま。」

「は、はい。」

遠道の雪一條、黒く點々こ辿る坊主合羽の少年を、心で追つた魂を、忽ち呼返されたやうに返事をした。

「いや、さながら、かよわい女、お身一人で……孤家の籠城をする體ぢや。雪は白いが、魔の火も人間の目には白いぞ。千萬の火矢を射かけて降るなあ。——姉ま、尋常ごこではないぞよ、此は。」

「阿闍梨様。」

お辻は、崩折れるやうに、黒疣に向合つた一脚の椅子に身を落した。

「何うしたらいでせう。」

「早急な手段はな、私の、恚う見る前で、帯を解いて、しめた紐までも除つて見せるのぢや。な、凡俗にさへ恥かしいものを、此の阿闍梨の眼に曝す……此が速に、悪業の一端を滅して、幾らか火難を逃るゝ方法ぢやよ。うむ、何うぢや、その腰のきれを。」

「可厭、あなた。」

颯あかくなつて、引肩に身をくねるのを、手首を握つて、ぐいさ留めて、

「なあ姉ま、家を焚けばとて、身を火あぶりになればとて、それが出来ぬか。——若い女ぢや。……あゝ、不便な。うむ、……待て待て、さし迫つた手相を見て進ぜよう、——おゝ、これは。」

「阿闍梨様放して、よ。」

「いや、不束な易者は、人間の皮を見る。眞の手相はな、確と肉を徹して血を見るのぢやよ

「……これは、じわりく、ミ、沈んで離れた脈を打つ——お辻姉、お辻姉……お身が膚は清らかであつて、それで、はや、つる／＼と膏があるのう。汗か、雪のやうな汗ぢや、お、これが乳か、いや觸りはせぬわい。が、究所ぢやぞよ。女人の相はこゝにある。この血の脈の打ちやう一つで、火と水が分るゝのぢや。——あゝ、やれく、氣の毒ぢやが、何うもこれは危いぞよ。」

襟が青く頬に映つて、血のやうな襦袢の胸。

「阿闍梨様、——堪忍して。」

「いや、私は知らぬ。——魔がなす悪火ぢや。——火を防ぐは火と言ふてな、又一つ……節分の今夜、五間、間敷あればその數五つ、七間に七つ、廁の中にまで、土器に燈火を點じて、火を防ぐ法もある——燈心、油の類はあるか。」

「えゝ、あきなひますから、少しづゝはありますけれど、一つだつて可恐いんですもの、人の居ません、二階へなんか、こんな氣味の悪い晩に、何うして裸火が置かれませう。」

「言ふほどでもない事ぢや。——こゝの初代は、九つの間があつた——その間ごこの火を、九つ、たつた三人で、それ、節分の夜と言ふと火沙汰のある可恐い夜中に守つたさな。それでこそ、せめて火元は免れた。ぢやが、其の心苦しさを思へ。——いま此處では、私が居て守つて進ぜる。可か、こゝへ泊つてな、私が泊れば火は防げるぞ。可か、うむ、可か、可えな。」

「あれ。」

「それ、こゝに打つ、しじりく／＼と水のしたるゝやうな、此が、此が却つて火の脈ぢやぞよ。火難の兆ぢや。」

「姉さん、水を一杯。」

——此の時であつた、若い容がきつぱりこ聲を掛けた。——

迷へる信仰に、弱き女の、身自ら落つるは言へ、囀にかゝつて鳥鷲に翼を掻いたお辻の、ハツミ似非阿闍梨を離れたのは、ツミ其の鷲を切つて、小鳥が土間を飛んだやうに見えるたのである。

——井戸からすぐに、茶碗で——こ誂へた。  
車井戸で。

凄じい吹雪の夜に、キリノキリ、ギイミ手繰らるゝ釣瓶の音は、手とゝもに白き魂の、水を傳ふばかり、階子段の裏の暗がりに高く響いた。

熟き聞き澄まして、腕を垂れつゝ、指で音譜を弾くが如く、釣瓶の音に和した若い男の手は、井戸の深さゝ水に届く緒の距離を、獨り測りつゝあるものゝ如くに見えた。

「あゝ、結構——此方へ。……いや、飲むのではありません。前刻から、聞くこともなしに

何となく聞きました。今夜の火沙汰を、此水で占つて上げやうと思ふんです。」

「まあ。」

「あゝ、汲みたての水は、何にしろ潔い。」

こ、カタリこ静に椅子を寄せた。外に降り亂るゝ雪を、影に曳くやうに見えて、若き其風采も、清らかに爽に、卓子の茶碗に、一掬の冷水に對したのである。

岩膜阿闍梨は、臺つきの硝子盃を攪りながら、中腰に浮いて覗いた、威容を整うるがためか、片手に澁團扇を忘れない。

「姉さん、いや、お嬢さん。」

「あの、旦那様。」

こ、口籠りながら、また臉を染めたが、

「私は、あの、旅をして居ります留守の人の、なんなのでございますわ。」こ肩で悄れる。若い男の屹とした態度は、客ゆるぎに繕ふ娘らしい色を許さなくなつたのである。

「井戸は浅く成りましたね。——水は殖えましたね、それが可いのです。それがために、底を汲んでも暖くありません、——水の冷いのは火のためにはいい事です。——火事の憂はありません。」

「まあ、貴方。」

「さ、ほつと吐いた息が、胸を乳の下まで通つて、卓子の端に柔に手をつくさ、お辻は嬉しさにほろりとして、そのまゝ、袖口を目に當てた。雪を籠めた燈に、櫻が薄く咲いた風情である。」

突いて覗いて、かいだ鼻を、仰向けに椅子に引いて、被布の腹で反つたる阿闍梨が、

「は、ん、お身は、水の八封置か。」

「いや、易者でも何でもありません。が、清い心で、澄んだ水を見れば、過去も未来もよく分るので。」

「は、ん、未来も過去も映す言ふかい。」

「火の消えた處はあつても、水のない世界はありませぬ。火を見るよりも明だと言ふのは、水に映る影なんです。」

「申すものぢやな、……言ふものぢやなあ。……後の事は先づおけい。——崇る火を三年免れて、四年目に此家の焚けた。ごだい、その業の火のいはれだけでも分るかな。——それが分らないでは、今夜の大事、無事なごと口巾たく饒舌れまいぞ。——分るまい。——姉ま、ぢやによつて言はぬ事ではないのぢや。その可憐い火はな、可えか、——これ、此の満團扇で煽出でたものぢやぞよ。」

「腕を張つて、——若い人にすり寄つたお辻の帯のあたりを、ばさりと握いだ。可厭な風である。」

「……其の團扇が、何、然も今日、猫の聲の前しらせて、破風口から飛込んだわ。可憐しい。——これ私に縫らいで、心に背くさ、たゞでは濟まんぞよ。年越の今夜は過ごせんぞ。」

こ、ぶわくと又煽いだ。

二一八

お辻はその毎に、ぞつ／＼と、なよやかな身をすくめる。

「大丈夫——そんなものは氣にしないで、この茶碗の水をよく御覽なさい。」  
彼は端正に膝を直した。

「こゝに……小さく、溢團扇が一つ水の中に見えませう。見えますね。爺さんが一人居てそれが、團扇を手を持って居るでせう。白髪の爺さんは、青い蜘蛛のやうな顔をして、その白髪が逆に立つて一方を睨んで居ませう。そして踏臺に、しやツきりこ腰を掛けて居るでせう。——見えますか。……見えますね。——居まはりに、山のやうに、燃草、鉤屑が積んであります。」

阿閼梨は顛割額の鼻の根に、うすい眉毛をびく／＼と擧めて寄せた。

「——この爺さんは、獨身もの、指物屋です。狭い町の眞向ふに、一軒八百屋があつて不斷、火をするやうに、快からぬ中で居ながら、止むを得ない事情から、家を抵當に、其

の八百屋に借金をしたのです。——金の始末がつかないで、いよく家を取られて、住居を追出される言ふ前の晩、——それが除夜でした……今夜です。夜中、一時頃に、我が家へ火をつけて、背戸へ出て、炎の中で、賣りもの、踏臺を床几にして、破れた溢團扇で眞向ふの、その八百屋に向つて、煽ぎたて／＼と焚死んだんです。が、御覽なさい、灰汁のやうな煙を巻いて、血の炎の流れる中に、胡麻のやうに、バラ／＼と黒く轉がるものがあります。八百屋の亭主、女房、婆さんの三人が、煽ぐ火の爺よりはさきへ煙にまかれて死んだんです。——茶碗の眞白な處は今夜のやうな矢張り雪だつたんです。こゝに阪があります。下を小川が流れて、榎の太木があつて、空を離れて高い處に塔のやうなもの、見えるのは——今はありませんが、此のお店の三軒さきにあつた三階の屋根です。榎が動いて居ますね、——炎を嫌つて、梢を振つて。——この樹は焼けないで、こゝへ飛んで、三階の棟へ思ひも掛けず飛火がして、其の時此の家が焚けたんです——それ、團扇が見えますね。」

二一九

むづ／＼と、二人の中へ割込みさうに近寄つた、阿闍梨の手を見ながら言つた。

「爺さんは煽いで居ますね。——あなた、しかし御安心をなさい、——この溢團扇は、斷じてあなたの身に觸るのではありません。」

「顔を、顔を。」

こ、岩膜阿闍梨は、喘いで、忙いて、

「顔を見せてくれい。」

「あ、見たまへ。」

「うむ、生ま白い。……怨念の爺の話は、わづかばかりの人のほか、誰も知らぬ筈と思ふたが。——うむ、幼顔に覺えがある。……お身は、此家の先代、焼出されの、表具屋の悴ぢやな。」

「何うしました、羅苧屋さん。——然う言ふ此方も障子張りだがね。」  
と言つた。

小八と言つて、この阿闍梨は、おなじ町内で、以前やすもの、煙管を張るのを職とした。邪教に凝つた親仁であつた。

「澤山ぬかせ。——表具屋の悴が學士に化けて、近頃此地の學校へ雇はれて來せをるこ、人の風説に聞いたが、睫毛に集つた虫は見えぬ。——ようこそ鼻のさきへ面を出いで、羅苧屋ぢやと吐したな。——これ、おのれの父親は、もごく／＼から宗旨での敵同士ぢや。羅苧屋でも仔細ない、お身が小學者に成る年數には、わいも山々、峯々の行を積んだぞ。——立去れ。町内の火伏の妨げぢや。その上に私がめす、食もの、邪魔をすると、爲めに成らぬ。これ、この女はな、わいが、この別嬪の母親からして、母娘二代に執着を掛けたお供物ぢや。早や筋も骨も萎いて、今夜にせまつて血肉を啖はうと思ふ處に、奇怪な蚊さんばが舞込んだ。——立去れい。」

容は居直つて屹こ見た。

渠は工學士、立川淳吉である。

「其の面構では失せ居るまいな。……よい／＼、姉までも、よう覚えて居れ。お辻……」  
 「芽生の學問如きで脉は分らぬ。人間の執着の行力を見せてくれう。覚えて居れ。たゞは置かぬぞ。」

「何を　る。」

ハタと擲つた提灯を、ハツと横に顔をかはすと、續け状に、網代笠を取る手も見せず、お辻の横顔にたゞきつけた。笠は外れて帳場へ飛んで、一呼吸さきに、お辻は淳吉の足に縦るやうに、うつむけに椅子に蹠つた。おくれ毛は白い頸に震へて居る。

「ふん、ふん、ふうん。」

黒疣を弾くが如く、ふかく／＼、ふやけた鼻を鳴らし／＼、團扇を片手に、杖を取つて戸に向いた、行者の袴は、さながら土間に獸の尾を曳く如く、吹込む雪が土間に吹敷く。

## 四

「まだ居ますわ、居ますんですよ。……あなた、何うしたら可いでせう。」

密と隙見をした表二階の白く成つた脇掛窓から、寒さこ不氣味さに、お辻は肩をわなわなこ、奥——と言ふ程もない、裏へ向いた——六疊ばかり、炬燵の傍へ、爪立つやうにして引返した。……

薄暗い電燈に、衣服の色もあせて、細い羽織の緋さへ雪にまみれたやうである。

「だん／＼何うも人間業ではなくなりましたよ。」

「ええ。」

お辻が上に引合はせる、前袂、膝もがく／＼して、お辻は見るにもいぢらしい。

「然うか言つて、決して鬼だの、魔だのゝする事だなどと思つては不可ません。——獸の所業ですよ。」

お辻は、其の炬燵に嚙りつくやうにしながら言つた。が、言ふものゝ、既にこの炬燵には火を入れない。實は火のない炬燵なのである。火どころか傍に火鉢もない。二階も下

階も、凡そ家中に、火の氣と言ふものは、餘さ 皆消して居るのである。寒國の吹雪の夜に、之は宛然狂人の爲す業。

が、岩膜阿闍梨の舉動を言つたら、はじめて頷かれようと思ふ。

あの行者は、前刻に腰障子を外に出るご同時に、あごもしめないで、ぎよろりご白眼に毒を漲らして、見返り状に、片足をバツミ舉げ、膝を掛けたが、みしりご、眞中から太杖を挫折つた。

向側なる神社の裏垣の前に、其の杖を組違へて、さす又形に、ふり積む雪に突さすご、むづみ腰を落して掛けて、お辻の店を眞正面に、満團扇で、屋の棟をこきおろすやうに上から、ねた柱を搦ふやうに下から、上下に煽ぎはじめたのである。

淳吉が、びつしやり腰障子を引くご、お辻はその上へ藩の樞戸をおろしたが。

風はすさび、雪はしきつて、時ならぬ熊、鯨のあれとも思ふ、眞夜中に成つても、聊も其處を動かないで、いま、煽ぎ續けて居るご思はれよ。……

帳場の火鉢さへ、淳吉が指圖して、火種も残さないで消さした。土間に松明、篝火を焚いて、邪悪の氣を打拂ふべき地位にある淳吉の此のたよりなさは。——

是非もない、節分の夜に續けて火沙汰のあつたご言ふ、其の二度までも、實は少年の折の淳吉の鹿匆で、二度ごも、二階の炬燵のために過失をしたのであつた。火伏のために、九ツの間に、九ツの燈明皿に火を配つて、其の燈心の火を守るのに、部屋々々を廻つて、だゞ広い臺所……廁までも、人すくなの佻しい折から、四年目の節分には、小年ながら責任を感じて、凄さと、可恐ごと、心細さと、何よりも不氣味さに、ぼろ／＼涙を流したご言ふほどの弱虫であるから。

ご言ふのも、今は焼けて、もう影もないが、此町々の窓を覗く、向ふ山の山の端に、三本松と稱へた松は、天狗の棲家と恐れられた。其の松の焚けたのは、春のたけなげな深夜であつたが。折から以前の家の此二階に、病の床について居て、夜も寝られなかつた、淳吉の、まだうら若い母が、ぼツミ障子に映る炎の影を、誰より眞先に見て、臍掛窓に手を掛



けると、目前に見える山の峰の、三幹の大松明の、火花を散らして燃ゆるのを見て、「あゝ、綺麗だ、綺麗だね。」と言つた。

火事だ。あれ、大變。」と驚けば、恐れもば可かつたのである——「除夜ごとの火沙汰を懸念して、淳吉の父が、鬼神に通ずる三稱へられた易者に占はせた時、易者が言つた。「往者からもまゝある事、天狗の火きて、眞個は燃えるのではない。不意に大なる炎を上げて、人の驚き恐るゝのを可笑がる、魔属の徒然の悪戯である。三本松の火も、實はそれであつた。……町において最初に見たであらう淳吉の母の「綺麗」と言つた、思つたのがおどすつもり魔の心に背いて、天狗は憤りをなした。腹だちまぎれに、眞に、その住家の三本松を焚いたのである、その祟だこ、易者が言つた。

誰に聞いたか、占つたか、事實は其の通りであつた。

但し火のたよりは、母のなくなつた翌年からはじまつたので、家の焚けたのは五年目であつた。

それぐの記憶のあるために、今度、縣の學校に聘せられて、着任したのはわづかに昨日の事であるのに、故郷の可懐さに、そぞろ町へ出るに雪に逢つた。もこの中學校がよひを思出して、故合羽うる店で、菅笠や莫の支度をした。その時、合羽屋の、臺所で、豆を煎る香いにほひに、今日の節分を知つた。

氣づかはるゝのは以前住んだ家のあたりの、火沙汰である。

いま住む人の人柄によつて、もし、言ふべくば、笑はるゝまでも迷信の注意をしよう。實は、そのために故らに訪ねたのであるから、四辻の濫團扇の稀有な形は、彼奴よりも淳吉の方が先に氣に掛けたほどなのである。

第一、美しい人の心弱さに對する、暴言に反抗ふために、水は清し、冷し、潔しと言ひは言つた。けれども、井戸水の其の實は、鐵氣よりも、むしろ薄く溝のほひを帯びて、且つ汚つて居た。

これ、家のために相して、祝すべき事ではなかつたのである。

此の心で、慙く人妻の家を守るのである。焦慮は實に察すべきであつた。

「旦那さん、何うなりませう。」

「此のくらの用心をすれば大丈夫です。」

「行者は死にはしますまいか。」

「こ、おどろ／＼して言ふ。」

「幾人も女房を病氣にして死なせた奴です。彼奴の死ぬのは勝手だけれど、絶間も、透間もなく煽いで居られるのは煩いですよ。」

「いくら其處等を閉めましても、ふう／＼風の來ますこと。」

既に表二階と言ふのが、――焚出されて、彌が上に不工面だつた淳吉の父が、半作事に床を張つたばかりで世を辭した。――あとの二代もそれなりで、疊はこの一間のほか今もつて敷いてない。

床板のあはせ目、すき間を、下の土間から吹き上げる風が、襖を突抜けて、みしく／＼と梁が鳴る。團扇で拂はれるやうに身に應へる。芥子粒の火の粉でも、この煽に誘はれると忽ち一面の炎に成りさうで懸念に堪へない。

「天井うらで、バチ／＼音がしますが何でせう。」

「鼠」

「あの、猫が騒ぎまして、此四五日、ちつとも鼠は居りません。」

「漏電でもするに不可いなあ、然うだ、危い、早速お消しなさい。」

「真暗で……」

「構ひませんとも。」

「旦那さん、矢張煽いで居ませうねえ。」

「仕方がない。たゞ夜のあけるまでの辛抱です、確乎なさいよ。」

「はい、……くらがり、冷酒ですけ、もうお一つ。……」

「いや、酒は澤山、もう口に泥みしました。……あゝ、煙草が喫みたい。——いゝえ、私好みの好きです。勝手に火の番をするんです。——前刻からも言ふ通り、恩にも被せられませんが、恩にも被せません。あなたが氣を揉むには決して當らないが、煙草だけはのみたいたいですよ。」

「後生でございますから、めしあがつて。……煙草をめしあがるくらゐは、——あなた。」

「それが不可い。嘘にしろ、火打石でさへ、天井から白いものが……。」

「あれ、可恐うございます。」

「隣寸ちやこの風に、どんな怪我があらうも知れませんが。」

「私、何うしたら可うございませうね。」

お辻はもう、ひつたりと寄添つて居たのである。

「お腹もおすきで居らつしやいませうし……せめてお餅でも焚いてご思ひましても、それも出来ません。火のない炬燵におあて申して。——あれ、まあ、炬燵蒲團の上が、さらさら

「致しますのは、吹込んだ雪でございますよ。——何ごも、何うもまるで地獄へお落し申したやうな。……私、私の身體で出来ます事なら……旦那様、さつき、あなたはお香合の淺漬の網がお氣に入りました。私の、私の身體を網の目に刻んでも、さしあげたう存じます。」

白い膚がちらく、網の目のやうに、幻に暗に浮いて、袖の花の咲くのが見える。

「お辻さん。」

雪と雪と打つやうに、唇の觸れた音。

「いやな、お煙草——お煙草ですわ……お煙草ですわ。」

「あなたの綺麗なのに迷ひました。——餘り算盤じみるんですが、交番へ届けるのが、一番よく、化行者を防げたのかも知れませんが……知つてしなかつたのではない、それさへ氣のつかないほどに、私は迷つたんです。お辻さん、あなたが、その窓を覗いたやうに、毎日、二階から撞憬れて居ながら、わけあつて其の人の死に、身投げに行くのを、雪の

降る晩、——十六七の少年ですから何うする事も出来なかつた。その時の娘さんに、あなたはそつくりなんです。——「今晚は。」「はい。」と言つて、その窓の上と……下で、それが別れで……」

と言つて聲もせまつた。

しばらくすると、樞は水に浮くやうに静に浮いて、腰障子が盗むやうに開いた。淳吉と、お辻の姿は、ふしまろんで戸口へ出た。いや、並んで立つて出たが、横吹の雪に吹廻されためめに、然う見へたのである。

二人は、家も、身も守るに堪へなかつた。

且つ慙うするのが、のろひの遊團扇を防ぐに、最上の策であることに氣づいたからである。嫉ましいものゝない空家をば煽ぐまい。何故早く心が着かなかつたであらう。

行者の軀は、堆く成つて、眞白な瓦焼の籠が、口から火を吹くやうに遊團扇が渦に動いて居た。

軀も通抜けたが、しかし、同じ處に、厄じやうに、煽ぐのが留まなかつたのである。大きな榎で阪が知れる。——二人が吹雪の峠を越したやうに、一阪、下町へ下りた時、

どゞツツ風が空へ、火の手が上つた。

恰も酒店の家の真上である。雪に籠つて擴がる火は、櫻が霞むだやうである。

お辻は打たれたほどに、腰を落した。炎の影は、紅に膝にこぼれて、褌が雪を染めて美しい。

吹取られた笠を手に取つて、女を庇つた淳吉の姿は、ちぎれる様に白かつた。失火の原因はわからない。

心中をしたさか。行方が知れないさか聞く。——二人は若かつた。故郷の濕地の老蝦蟇が、冬眠ればきて、凍死などするものか。……樞をおろしたあこの或時間を経てからは、垣長く結んだ破團扇ばかりが、恣に吹雪に荒れ狂つて居たのであつた。

析  
の  
實

朝六つの橋を、その明方に渡つた——此の橋のある處は、いま麻生津と云ふ里である。それから三里ばかりで武生に着いた。みちく可懐い白山にわかれ、日野ヶ峯に迎へられ、やがて、越前の御嶽の山懐に抱かれた事は云ふまでもなからう。——武生は昔の府中である。

其の年は八月中旬、近江、越前の國境に凄じい山嘯の洪水があつて、いつも敦賀——其處から汽車が通じて居た——へ行く順路の、春日野峠を越えて、大良、大日枝、山岨を斷崖の海に沿ふ新道は、崖くづれのために、全く道の塞つた事は、もう金澤を立つ時から分つて居た。

前夜、福井に一泊して、その朝六つ橋、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俾で過ぎて、九時頃武生に着いたのであつた。——誰も言ふ……此處は水の美しい、女のきれいな處である。柳屋の柳の陰に、門走る谿河の流に立つ姿は、まだ朝霧を其のまゝの、萩にも女郎花にも較べらるゝ。が、それどころではない。前途のきづかはしきは、俾も此宿で留まつて、あとの山路は、その、いづれに向つても、もはや通じないと言ふのである。

茶店の縁に腰を掛けて、濃茶を飲みながら評議をした。……春日野の新道一條、勿論不可い。湯の尾峠にかゝる山越え、それも覺束ない。たゞ道は最も奥で、山は就中深いが、栃木峠から中の河内は越せさうである。それには一週間ばかり以來、郵便ぶつが通ずると言ふのを聞くさへ、雁の初日より、古の名將、また英雄が、涙に、響に、屍を埋め、名を残した、あの、山また山、また山の山路を、重る峠を、一羽でとぶか、と袖をしめ、襟を合はせた。山靈に對して、小さな身體は、既に茶店の屋根を覗く、御嶽の腮に吞まれて

居たのであつた。

「氣をつけておいでなせえましょ。……嗚は荒れて、洪水に松の並木も倒れた、たゞ畔のやうな街道端まで、福井の車夫は、笠を手にして見送りつゝ、われさへ指す方を知らぬ状ながら、式ばかり日にやけた黒い手を舉げて、白雲の前途を指した。

秋のはじめの、空は晴れつゝ、熱い雲のみ往來して、田に立つ人の影もない。稲も、畠も、夥多しい洪水のあとである。

道を切つて、街道を横に潮をつくる、流に迷つて、根こそぎ倒れた並木の松を、丸木橋とよりは筏に踏むで、心細さに見返ると、車夫はなほ手廂して立つて居た。

翼をいためた燕の、ひとり地づれに迎るのを、あはれがつて、去りあへず見送つて居たのであらう。

たゞさへ行惱むのに、秋暑しと云ふ言葉は、残暑の酷しさより身にこたへる。また汗の目に、野山の赤いまで暑かつた。汗水には荒れても、稲葉の色、青菜の影ばかりはあらうと

思ふのに、あの勝山とは、まるで方角が違ふものを、右も左も、泥の乾いた煙草畑で、喘ぐ息さへ舌に辛い。

祖母が縫つてくれた靴代用の更紗の袋を、繕つかひに掛けたばかり、身は軽いが、そのかはり洋傘の日影も持たぬ。

紅葉先生は、その洋傘が好きでなかつた。遮らなければ成らない日射は、扇子を隠されたものである。従つて、一門の誰かれが、大概洋傘を意に介しない。連れて不忍の非見から、入谷の朝顔など、云ふ砌は、一杯のんだ片頬の日影に、揃つて扇子をかざしたのである。せずともいゝ眞似をして。……勿論、蚊を、いや、蚊帳を殺して飲むほどのものが、歩行くに日よけをするわけではない。蚊帳の方は、まだしかし人ぎゝも憚るが、洋傘の方は大威張で持たずに済んだ。

神楽坂邊をのすのには、成程（なし）で以て事は済むのだけれども、此の道中には、困却した。剩へ……其の年は何處も陽氣が悪かつたので、私は腹を痛めて居た。祝儀らしい眞

似もしない悲しさには、柔い粥とも誂へかねて、朝立つた福井の旅籠で、むれ際の飯を少しばかり。しく／＼下腹の痛む處へ、洪水のあとの乾早は眞にこたへた。烏打帽の皺びた上へ手拭の頬かむりぐらいでは追着かない。早や十月の聲を聞いて居たから、護身用の扇子も持たぬ。路傍に藪はあつても、竹を挫き、枝を折るほどの勢もないから、玉江の蘆は名のみ聞く、……湯のやうな浅沼の蘆を折取つて、くる／＼とまはしても、何、秋風が吹くものか。

が、一刻も早く東京へ——唯その憧憬に、山も見ず、雲も見ず、無二無三に道を急いで忘れもしない、村の名の虎杖に着いた時は、杖と云ふ字に縫りたい思がした。——近頃は多く枝取と書くのを見る。その頃、藪家の軒札には虎杖村と書いてあつた。

ふと、軒に乾した煙草の葉と、蕃菽の間に、山駕籠の煤けたのが一挺掛つた小家を見て、朽椽へ控と掛けた。「小父さん、もう歩行けない。見なざる通りの書生坊で、相當、お駄賃もあげられないけれど、中の河内まで何とかして駕籠の都合は出来ないでしょうか。」



ればの。「耳にかけた輪珠數を外すと、木綿小紋のちやん／＼子、經肩衣とか云つて、紋の着いた袖なしを——外は暑いがもう秋だ——もつくりと着込んで、裏納戸の濡椽に胡座かいて、横脊戸に倒れたまゝ眞紅の花の小さく成つた、鳳仙花の叢を視めながら、煙管を横御へにして居た親仁が、一膝づるりと摺つて出て、「一肩遣つても進じやうがの、對手を一つ聞かなくては、のう。」「お願ひです、身體もわるし、……實に弱りました。」「待たつせえ、何とかすべし。」お佛壇へ珠數を置くと、えいこらと立つて、土間の足半を突掛けた。五十の上だが、しやんとした足つきで、石碓道に向ふへ切つて、樗の花が咲重りつゝ、屋根ぐるみ引傾いた、日陰の小屋へ潜るやうに入つた、が、今度は經肩衣を引脱いで、小脇に絞つて取つて返した。「對手も丁度可かつたで。」一人で駕籠を下すのが、腰もしやんと樂なもので。——相棒の肩の廣い、年紀も少し少いのは、早や仕度をして、駕籠の荷棒を、えツしと擔ぎ、片手に——はじめて視た——繪で知つてほど想像のつく大きな糞虫を提げて出て來たのである。「あゝ、御苦勞様——松明ですか。」「えい、松明でや。」「途中、山路

で日が暮れますか。「何、歸りの仕度でや、夜嵐で提灯は持たねえもんだで。」中の河内までは、往還六里餘と聞く。——駕籠は夜をかけて引返すのである。

留主に念も置かないで、そのまゝ駕籠を昇出した。「おゝ、あんばいが悪いだね、冷えては成んめえ。」樹立の暗く成つた時、一度下ろして、二人して、二人が夜道の用意をした、どんつくの半纏を駕籠の屋根につけたのを、敷かせて、一枚、一枚、背中に當がつて、情に包んでくれたのである。

見上る山の巖膚から、清水は雨に滴つて、底知れぬ谷暗く、風は梢に渡りつゝ、水は蜘蛛手に岨を走つて、駕籠は縦に成つて雲を仰いだ。

前棒の親仁が、「此の一山の、見さつせえ、残らず柄の木の大木でや。皆五抱へ、七抱へぢや。」「森々としたもんでがんしやうが。」と後棒が言を添へる。「いかな日にも、はあ、眞夏の炎天にも、此の森で一度雨の降らぬ事はねえので。」清水の雫且つ迫り、藍縷の袴の袖も、森林の陰に墨染して、襟はおのづから寒かつた。——加州家の御先祖が、今の武生

の城にござらした時から、斧入れすでの。何う云ふものか、はい、御維新前まで、越前の中で、此處一山は、加賀領でござつたよ——お前様、なつかしかんべい。「いや、僕は些とでも早く東京へ行きたいんだよ。」「お若いで、えらい元氣ぢやの。……はいよ。」「おいよ。」と聲を合はせて、道割の小瀧を飛んだ。

私は駕籠の手に確と縄つた。

草に巨人の足跡の如き、杵形の峯の平地へ出た。積々相迫つた、かすかな空は、清朗にして、明碧である。

山氣の中に優しい聲して、「お掛けなさいましたな。」軒は巖を削れる如く、棟廣く柱黒き峯の茶屋に、木の根のくりぬきの火鉢を据へて、疊二疊にも餘りなむ、大熊の皮を敷いた彼方に、出迎へた、むすび髪の白色な若い娘は、唯見ると活ける其の熊の背に、片膝して腰を掛けた、奇しき山媛の風情があつた。

袖も靡く。……山嵐颯として、白い雲は、その黒髪の肩越に、裏座敷の崖の欄干に掛つ

て、水の落つる如く、千仞の谷へ流れた。

その裏座敷に二人一組、別に一人、一人は旅商人、二人は官吏らしい旅客が居て憩つた。いづれも、柳ヶ瀬から、中の河内越して、武生へ下る途中なのである。

横づけの駕籠を覗いて、親仁が、「お前さま、おだるけりや、お茶を取つて進ぜますで。」「いゝえ出ますから。」

娘が塗盆に茶をのせて、「あの、栃の餅、あがりますか」「駕屋さんたちにも何うぞ。」「はい。——其處に三人の客にも酒はない。皆栃の實の餅の盆を控へて居た。

娘の色の白妙に、折敷の餅は澁ながら、五ツ、茶の花のやうに咲いた。が、私は矢張り腹が痛んだ。

勘定の時に、其を言つて断つた。——「うまくないものゝやうに、皆残して済みません。」あゝ、娘は、茶碗を白湯に汲みかへて、熊の膽をくれたのである。私は、じつと視て、而してのんだ。

柄の餅を包んで差寄せて。「堅くなりましやうけれど、……あの、もう二度とお通りにはなりません。こんな山奥の、おはなしばかり、お土産に。——此の實を入れて携きますのです、あの、餅より此を、お土産に。」と、めりんすの帯の合せ目から、ことりと拾つて、白い掌で、此方に渡した。

小さな鶏卵の、軽く角を取つて扁めて、薄漆を掛けたやうな、艶やかな堅い實である。すかすと、きめに、うすもみぢの影が映る。

私はいつまでも持つて居る。

手箒笥の抽斗深く、時々思出して手に据えると、殻の裡で、優しい音がする。

雨  
ふ  
り

一瀬を低い瀧に颯と碎いて、爽かに落ちて流るゝ、桂川の溪流を、石疊で堰いた水の上を堰の其の半ばまで、足駄穿で渡つて出て、貸浴衣の尻からげ。梢は三階の高樓の屋根を抽き、枝は川の半ばへ差蔽ふた榎の下に、片手に番傘を、トンと肩に持たせながら、片手釣で軽く岩魚を釣つて居る浴客の姿が見える。

片足は、水の落口に瀬を搦めて、蘆のそよぐが如く、片足は鷺の眠つたやうに見へる。堰の上の水は一際青く澄んで静である。其處には山椿の花片が、此のあたり水中の岩を飛び岩を飛ぶ、胸毛の黄色な鶺鴒の雌鳥が含みこぼした口紅のやうに浮く。

雨はしとくと降るのである。上流の雨は、うつくしき雫を描き、下流は繁吹に成つて

散る。しとくと雨が降つて居る。

このくらゐの雨は、竹の子笠に及ぶものかと、半纏ばかりの頬被で、釣棒を、刺して見しよ、と腰にきめた村男が、山笹に七八尾、銀色の岩魚を徹したのを、得意顔にぶら下げつゝ、若葉の陰を岸づたひに、上流の一本橋の方からすたくと跣足で来た。が、折からのたそがれに、瀬は白し、氣を籠めて、くるくくる、カカカと音を調ぶる、瀧の下なる河鹿の聲に、歩を留めると、其處の釣人を、じろりと見遣つて、空しい渠が腰つきと、我が獲ものを見較べながら、かたまけると云ふ笑方の、半面大ニヤリにニヤリとして、岩魚を一振、ひらめかして、また、すたく。……で、すこし岸をさがつた處で、中流へ掛渡した歩板を渡ると、其處に木小屋の柱ばかり、圍の疎い「獨釣の湯」がある。——屋根を葺いても、板を打つても、一雨強くかゝつて、水嵩が増すと、一堪りもなく押流すさうでいつも然うしたあからさまな體だと云ふ——

半纏着は、水の浅い石を起して、山笹をひつたり挟んで、細流に岩魚を預けた。濺刺と

言ふのは此であらう。水は尾鰭を泳がせて岩に走る。そのまゝ、すぼりと裸骸に成つた。半纏を脱いだあとで、頬かぶりを取つて、ぶらりと提げると、すぐに湯氣とゞもに白い肩、圓い腰の間を分けて、一個、忽ちぶくりと浮いた茶色の頭と成つて、そしてばちやくと湯を刎ねた。

時に、其の一名、弘法の湯の呈露なことは、白膏の群像とまでは行かないが、順禮道者、村の娘、嬰兒を抱いた乳も浮く……在の女房も入交りで、下積の西洋畫を川で洗濯する風情がある。

この共同湯の向ふ傍は、淵のやうにまた水が青い。對岸の湯宿の石垣に咲いた、枝も撻な山吹が、ほのかに影を淀まして、雨は細く降つて居る。湯氣が霞の凝つたやうにたなびいて、人々の裸像は、時ならぬ朧月夜の影を描いた。

肝心な事を言忘れた。——木戸錢はおろか、遠方から故々汽車賃を出して、お運びに成

つて、これを御覽なさらうとする道徳家、信心者があれば、遮つてお留め申す——如何となれば、座敷の眩掛窓や、欄干から、かゝる光景の見られるのは、年に唯一兩度ださうである。時候と、時と、光線の、微妙な配合によつて、しかも、品行の方正なるもののみあらはるゝ幻影だと、宿の風呂番の（信さん）が言つた。——案ずるに、此は修善寺の温泉に於ける、河鹿が吐く蜃氣楼であるらしい。かたゞ、そんな事はあるまいけれども、獨り、鉛の湯の恁る状態をあてにして、お出かけに成つては不可い。……

ゴウ——ンと雨に籠つて、修善寺の暮六つの鐘が、かしらを打つと、それ、ふツと皆消えた。……むくくと湯氣ばかり。堰に釣をする、番傘の客も、槻に暗くなつてもう見えぬ。葉末の電燈が雫する。

女中が廊下を、ばたくと膳を運んで来た。ありがたい、一銚子。床の櫻もしつとりと盛である。

が、取立て、春雨のこの夕景色を話さうとするのが趣意ではない。今度の修善寺ゆきには、お土産話が一つある。

何事も、しかし、其の的に打撞るまでには、弓と云へども道中がある。酔つて言ふのではないけれども、ひよろくと矢の夜汽車の状から、御一覽を願ふとしよう。

先以て、修善寺へ行くのに夜汽車は可笑い。其處に仔細がある。たまくの旅行だし、静岡まで行程を伸して、都合で、あれから久能へ廻つて、龍華寺——一方ならず、私のつたない作を思つてくれた齋藤信策（野の人）さんの墓がある——其處へ参詣して、蘇鐵の中の富士も見よう。それから清水港を通つて、江尻へ出ると、もう大分以前に成るが、神田の叔父と一所の時、わざとハイカラの旅館を逃げて、道中繪のやうな海道筋、町屋の中に、これが昔の本陣だと叔父が言つた。だゞつ広い中土間を奥へ抜けた小座敷で、お平についた長芋の厚切も、大鮎の刺身の新しさも覚えて居る。いま通つて来た、あの土間の處に腰を掛けてな、草鞋で一飯をしたものよ。爐端で挨拶をした、面長な媼さんを見たか。

……其の時分は、島田齋で惱ませたぜ。」と、手酌で引かけながら叔父が言つた——古い旅籠も可懐い。……

それとも、静岡から、すぐに江尻へ引返して、三保の松原へ飛込んで、天人に見参し、きものを欲しがる連の女に、羽衣、瓔珞を拜ませて、小濱や金紗のだらしなさを思知らさう、ついでに萬葉の印を結んで、山邊の赤人を、桃の花の霞に顯はし、それ百人一首の三枚めだ……田子の浦に打出で、見れば白妙の——じやあない、……田子の浦ゆさ、打出で、見れば眞白にぞ、だと、ふだん亭主を彌次喜多に扱ふ女に、學問のある處を見せてやらう。たゞしどつち道資本が掛る。

湯治を幾日、往復の旅錢と、切詰めた懐中だし、あひ成りましやう事ならば、其の日のうちに修善寺まで引返して、一旅籠かすりたい。名案はないかな、と字の如く案ずると……あゝ、今にして思當つた。人間朝起をしなけりや不可い。東京驛を一番で立てば、無理にも右様の計略の行はれない事もなさうだが、籠城難儀に及んだ處で、夜討は眞似ても、

朝がけの出来ない愚將である。碎いて言へば、夜遁は得手でも、朝旅の出来ない野郎である。あけ方の三時に起きて、たきたての御飯を掻込んで、四時に東京驛などゝは思ひも寄らない。——名案はないかな——こゝへ、下町の姉さんで、つい此間まで、震災のために遁げて居た……元來、静岡には親戚があつて、地の理に明かな、粹な軍師が顯はれた。「……九時五十分かの終汽車で、東京を出るんです。……静岡へ、丁ど、夜あけに着きますから。其だと、どつちを見ぶつしても、其の日のうちに修善寺へ参られますよ。」  
妙。

奇なる哉、更に一時間いくらと言ふ……三保の天女の羽衣ならねど、身にお寶のかゝる其の姉さんが、世話になつた禮かたぐ、親類へ用たしもしたから、お差支えなくば御一所に、——お差支え？……おつしやるもんだ！至極結構。で、たゞ奴で連出す算段。あゝ、紳士、客人には、あるまじき不見を、うまれながらにして喜多八の性をうけたしがなさに、恭えと、安敵のやうな笑を漏らした。

處で、その、お差支のなさを裏がきするため、豫て知合ではあるし、綴蓋の喜多の案内が、折からきれめの鯉節をイへ買出しに行くついでに、その姉さんの家へ立寄つて、同行三人の目取をきめた。

——一寸、ふでを休めて、階子段へ起つて、したの長火鉢を呼んで曰く、

「……それ、何——あの、みやげに持つて行つた勘茂の半べんは幾つだつけ。」

「だしぬけに何です……五つ。」

「五つか——私はまた二つかと思つた。」

「唯た二つ……」

「だつて彼家は二人きりだからさ。」

「見つともないことをお言ひなさいな。」

「よし、あひ分つた。」

五つださうで。……其を持參で、取極めた。たつたのは、日曜に當つたと思ふ。念のた

め、新聞の欄外を横に覗くと、その終列車は糸崎行としてある。——糸崎行——お恥かし  
いが、私に其の方角が分らない。棚の埃を拂ひながら、地名辭典の索引を繰ると、糸崎と  
言ふのが越前國と備前國とに二ヶ所ある。私は東西、いや西北に迷つた。——敢て子供衆に  
告げる。學校で地理を勉強なさい。忘れては不可ません。さて、どつち道、静岡を通るに  
は間違のない汽車だから、人に教も受けないで済ましたが、米原で廻るのか、岡山へ真直  
か、自分たちの乗つた汽車の行方を知らない、心細さと言つてはない。しかも眞夜中の道  
中である。箱根、足柄を越す時は、内證で道祖神を拜んだのである。

處で雨だ。當日は朝のうちから降出して、出掛ける頃は横しぶきに、どつと風さへ加つ  
た。天の時は雨ながら、地の理は案内の美人を得たぞと、もう山葵漬を箸の尖で、鯛飯を  
茶漬にした勢で、つひ此頃筋向の驛さんに教をうけた、市ヶ谷見附の鳩じると言ふ、  
やすくて深切なタクシーを飛ばして、硝子窓に吹つける雨模様も、おもしろく、馬に成つ  
たり、駕籠に成つたり、松並木に成つたり、山に成つたり、嘘のないところ、溪河に流れ



たりで、東京驛に着いたのは、まだ三十分ばかり發車に間のある頃であつた。

水を打つたとは此の事、停車場は割に静で、しつとりと構内一面に濡れて居る。赤帽君に荷物を頼んで、広い處をづらりと見渡したが、約束の同伴はまだ来て居ない。——大廻りには成るけれど、吳服橋を越した近い處に、バラツクに住んで居る人だから、不斷の落着家さんだし、悠然として、やがて來よう。

「静岡まで。」

と切符を三枚頼むと、つれを捜してきよろついた様子を案じて、赤帽君は深切であつた。

「三枚？」

「つれが來ます。」

「あゝ、成程。」

突立つて居ては出入りの邪魔にもなりさうだし、とぼ口は吹降りの雨が吹込むから、奥へ入つて、一度覗いた待合へ憩んだが、人を待つのに、停車場で時の針の進むほど、胸の

あわたゞしいものはない。「こんな時は電話があるとな。」「もう見えましよう。——こゝに居らつしやい。……私が行つて見張つて居ます。家内はまた外へ出て行つた。少々寒し、不景氣な薄外套の袖を貧乏ゆすりにゆすつて居ると、算木を四角に並べたやうに、クツションに席を取つて居た客が、そちこちばら／＼と立掛る。……「やあ」と洋杖をついて留まつて、申折帽を脱つた人がある。すぐに私と口早に震災の見舞を言交した。花月の平岡權八郎さんであつた。「どちらへ。」「私は人を一寸送りますので。」「終汽車ではありませんまいね。それだと静としては居られない。」「神戸行のです。」「私はそのあとで、静岡まで行くんですが、糸崎と言ふのは何處でしやう。」「さあ……」と言つた、洋行がへりの新橋のちやき／＼も、同じく糸崎を知らなかつた。

此の一たてが、ぞろ／＼と出て行くと、些と大袈裟なやうだが待合室には、あとに私一人と成つた。それにしても静としては居られない。……行——行と、呼ぶのが、何うやら神戸行を飛越して、糸崎行——と言ふやうに寂しく聞こえる。急いで出ると、停車場の入口に、こ

にも唯一人、コートの裾を風に颯と吹まどはされながら、袖をしめて、しよぼ濡れたやうに立つて、雨に流るゝ燈の影も見はぐるまいと立つて居る。

「來ませんねえ。」

「來ないなあ。」

しかし、十時四十八分發には、まだ十分間ある、と見較べると、改札口には、知らん顔で、糸崎行の札が掛つて、改札のお係は、剪で二つばかり制服の胸を叩いて、閑也と済まして居らるゝ。此を見ると、私は富札がカチンと極つて、一分で千兩とりはぐしたやうに氣抜けがした。が、ぐつたりとしては居られない。改札口の閑也は、もう皆乗込だあとらしい。確に十分をくれましたわね、然ういへば、十時五十分とか言つて居なすつたやうでした。——時間が變つたのかも知れません。慥う言ふ時は、七三や、耳かくしだと時間間違ひはなからう。——わがまゝのやうだけれど、銀杏返や圓髻は不可い。「だらしはないぜ、馬鹿にして居る。」が、憤つたのでは決してない。一寸の旅でも婦人である。髪も結つたら

うし、衣服も着換へたらうし、何かと支度をしたらうし、手荷もつを積んで、車でこゝへ駆けつけて、のりをくれて、雨の中を歸るのを思ふとあはれである。「五分あれば間にあひましよう。」其處で、別の赤帽君の手透で居るのを一人頼んで、その分の切符を托けた。こゝへ駆けつけるのに人数は恐らくなからう。「あなた氣をつけてね、春のすらりとした容子のいゝ、人柄な方が見えたら大急ぎで渡して下さい。」畜生、騙らせてやれ——女の口で赤帽君に、慥う言つた。

「お氣の毒様です。——おつれはもう間に合ひません。……切符はチツキを入れませんか、代價の割戻しが出来ます。」

もう動き出した汽車の窓に、するく〜と縫りながら、

「お歸途に、二十四——と呼んで下さい。その時お渡し申しますから。」

糸崎行の此の列車は、不思議に糸のやうに細長い。いまにも遙な石壇へ、面長な、白い顔、袴の細いのが驅上らうかと、且つ危み、且つ奇ち、且つ焦れて、窓から半身を乗出し居た私たちに慇懃に然う言つてくれた。

——後日、東京驛へ歸つた時、居合はせた赤帽君に、その二十四——のを聞くと、丁ど非番で休みだと云ふ。用をきいて、ところを尋ねるから、麴町を知らして歸ると、すぐその翌日、二十四——の赤帽君が、わざ／＼山の手の番町まで、「御免下さいまし。」と丁寧に門をおとづれて、切符代を返してくれた——此の人ばかりには限らない。静岡でも、三島でも、赤帽君のそれ／＼は、皆もの優しく深切であつた。——お禮を申す。

浅黄の暗い、クッションも又細長い。室は悠々とすいて居た。が、何となく落着かない。「呼んだら聞こえさうですね。」「呉服橋の上あたりで、此のゴーと言ふ奴を聞いてるかも知

れない。」「驛前のタクシーなら、品川で間に合ふかも知れませんよ。」「そんな事はたゞ話だよ。」唯、バスケットの上に、小取廻しに買ったらしい小形の汽車案内が一冊ある。此が私たちの近所にはまだなかつた。震災後は發行が後れるのださうである。

いや、張合もなく開くうち、「あゝ、品川ね。」カタリと窓を開けて、家内が抜出しさうに窓を覗いた。「駄目だよ。」その癖、私も覗いた。……二人三人、乗組んだのも何處へか消えたやうに、もう寂寥する。幕を切つて扉を下ろした。風は留んだ。汽車は驟雨の中を陰々として行く。早くさみしい事は、室内は、一人も残らず長々と成つて、毛布に包まつて、皆寝て居る。

東枕も、西枕も、枕したまゝ何處をさして行くのであらう。汽車案内の細字を、しかめ面で恠う透すと、分つた——遙々と京大阪、神戸を通る……越前ではない、備前國糸崎である。と、發着の驛を静岡へ戻して繰ると、「や、此奴は弱つた。」思はず聲を出して呟いた。静岡着は午前まさに四時なのであつた。いや、串戯ではない。午前などゝ文化がたり、朝

がつたりしては居られない。此の頃ではまだ夜半ではないか。南洋から土人が来ても、夜半に見ぶつが出来るものか。「此奴は弱つた。」——件の同伴でないつれの案内では、あけ方と言つたのだが、此方に遠き慮がなかつた。その人のゆきゝしたのは震災のちきあとだから、成程、その頃だと夜があける。——此の時間前後の汽車は、六月七月だと國府津でもう明るなる。八月の聲を聞くと、富士驛で、まだ些と待たないと、東の空がしらまない。私は前年、身延へ参つたので知つて居る。

「あの、此の汽車が、京、大阪も通るのだとすると、夜をあけるのは何處らでしやうね。」  
 「時間で見ると、すつかり明るなるのは、遠江國濱松だ。」  
 と退屈だし、一つ遠江國と念を入れた。

「横に俵が二挺たゝぬ——彼處ですか。」

「うむ。」とばかりで、一向おもしろくも何ともない。

「其處まで行きましやうよ。——夜中に知らぬ土地ぢやあ心細いんですもの。」  
 「館ぢやあるまいし。」

と、愚にもつかぬことをうつつかり儼舌つた。静岡まで行くものが、濱松へ線路の伸びやう道理がない。

……しかし無理もない。こんな事を言つたのは恰も箱根の山中で。丁ど丑満と言ふ時刻であつた。あとで聞くと、此の夜汽車が、箱根の隧道を潜つて鐵橋を渡る刻限には、内に留守をした女中が、女主人のためにお題目を稱へると言ふ約束だつたのださうである。

「何の眞似だい。」

「地震で危いんですもの。」

「地震は去年だぜ、ばかな。」

然りと雖も、その志、むしろにあらす捲くべからず、石にあらす、轉すべからず。

……ありがたい。いや、禁句だ。こんな處で石が轉んで堪るものか。たとへにも山が崩るゝとか言ふ。其の山が崩れたので、當時大地震の觸頭と云つた場所の、剩へ此の四五日琅玕の如き蘆ノ湖の水面が風もなきに浪を立てると、うはさした機であつたから。

山北、山北。——鮎の鮎は——賣切れ。……お茶も、——もうない。それも佗しかつた。

が、家を出る時から、こゝでこそと思つた。——實は其の以前に、小山内さんが一寸歸京で、同行だつた御容色よしの同夫人、とめ子さんがお心入の、大阪遠來の銘酒、白鷹の然も黒松を、四合壘に取分けて、バスケットとも言はず外套にあたくめたのを取出して、所帯持は苦しくつてもこゝらが重寶の、おかゝのでんぶの蓋ものを開けて、さあ、飲むぞ！ トネルの暗闇に慧星でも出て見ると、クツシヨンに胡座で、湯呑につぐと、ぶんとにほふ、と、かなで書けばおなじだが、其のぶんが、腥いやうな、すゑたやうな、どろりと腐つた、青い、黄色い、何とも言へない悪臭さよ。——飛でもないこと、……酒ではない。一體、散々の不首尾だらう、前世の業でももあるやうで、申すも憚つて控へたが、もう

黙つては居られない。たしか横濱あたりであつたらうと思ふ。……寂しいにつけ、陰氣につけ、隨所停車場の燈は、夜汽車の窓の、月でも花でもあるものを——心あての川崎、神奈川あたりさへ、一寸の間だけ、汽車も留つたやうに思ふまで、それらしい燈影は映らぬ。汽車はたゞ、曠野の暗夜を時々けつまづくやうに慌しく過ぎた。あとで、あゝ、あれが横濱だつたのかと思ふ處も、雨に濡れしよびれた棒杭の如く夜目に映つた。確に驛の名を認めたのは最う國府津だつたのである。いつもは大船で座を直して、かなたに逗子の巖山に、湘南の海の渚におはします、岩殿の觀世音に禮し參らす習であるのに。……それも本意なさの一つであつた。が、あらためて祈念した。やうなわけで、其の何の邊であつたらう。見上げるやうな入道が、のろりと空へ入つて來た。づんぐり肥つたが、年紀は六十ばかり。ト頭から頬へ縦横に縋帯を掛けて居る。片頬が然らでも大面の面を、別に一面顔を横に附着けたやうに、だぶりと膨れて、咽喉の下まで垂下つて、はち切れさうで、ぶよくして、わづかに目と、鼻。縋帯を覗いた唇が、上下にべろんと開いて、どろりと

して居る。動くと、たらくと早や膿の垂れさうなのが——丁ど明いて居た——私たちの隣席へどろくと崩れ掛つた。オペラパツクを提げて、飛模様の派手な小袖に、紫の羽織を着た、十八九の若い女が、引續いて、黙つて其の傍へ腰を掛ける。

と言ふうちに、その面二つある病人の、その、臭氣と言つたらない。

お察しあれ、知己の方々。——私は下駄を引ずつて横飛びに遁出した。

「あゝ、彼方があんなに空いて居る。」

と小戻りして、及腰に、引こ抜くやうにバスケットを掴んで、慌てゝ這つて、片足で、怪飛んだ下駄を捜して遁げた。氣の毒さうな顔をしたが、女もそつと立つて来る。

此の様子を、間近に視ながら、毒のある目も見向けず、呪咀らしき咳もしないで、すべりと窓に仰向いて、病の顔の、泥濘から上げた石臼ほどの重いのを、じつと支へてる居病人は奇特である。

いや特勝である。且以て、たうとくさへあつた。

面當がましく氣の毒らしい、我勝手の凡夫の浅間しさにも、人知れず、面を合はせて、私たちは恥入つた。が、薬王品を誦しつゝも、鯖くつた法師の口は臭いもの。其の息さといつては、昇降口の其方の端から、洗面所を盾にした、いま此方の端まで、むつと鼻を衝いて臭つて来る。番町が、又大袈裟な、と第一近所で笑ふだらうが、いや、眞個だと思つて下さい。のちに、やがて、二時を過ぎ、三時になり、彼方此方で一人起き、二人さめると、起きたのが、覺めたのが、いづれもきよとんとして四邊を見ながら、皆申合はせたやうに、ハシケチで口を押へて、げつと咽せる。然もありなむ。大入道の眞向に寝て居た男は、たあいなく寝ながら、うゝと時々苦しさに魔された。スチームがまだ通つて居る。しめ切つた戸の外は蒸すやうな驟雨だ。臭くないはふはない。

女房では、まるで年が違ふ。娘か、それとも因果何とか言ふ妾であらうか——何にしろ、私は、其の耳かくしであつたのを感謝する。……島田鬚では遺切れない。

もう箱根から驅落だ。

二人分、二枚の戸を、一齊にスツと開くと、岩膚の雨は玉清水の滴る如く、溪河の響きに煙を洗つて、酒の薫が芬と立つた。手づから此をおくられた小山内夫人の袖の香も添ふ。二三杯たつた。

阿部川と言へば、きなこ餅とばかり心得、「賛成。」とさきばしつて、大船のサンドピッチ、國府津の鯛飯、山北の鮎の鮮と、そればかりを當にして、皆買つて食べるつもり、足柄に縁のありさうな山のかみは、おかゝのでんぶを詰らなさうに覗きながら、バスケットに凭れて弱つて居る。

「なまじ所帯持だなどと思ふから欲が出ます。かの彌次郎の詠める……可かい——飯もまだ食はず、ぬますを打過ぎて、ひもじき原の宿につきけりと、もう——追つゝけ沼津だ。何事も彌次喜多と思へば濟むぜ。」

と、とのさまは今の二合で、大分御機嫌。ストーンと、いや、床が柔軟いから、ストーンでない、スポンと寝て、肱枕で、阪地到来の芳酒の酔だけに、地唄とやらを口誦む。

お前の袖と、わしが袖、合せて、

——何とか、何の袖。……たゞし節なし、忘れた處はうる抜きで、章句を口のうちに、唯引張る。……

露地の細道、駒下駄で——

南無三寶、魔が魅した。ぶくくのしくと海坊主。が——あゝ、此を元來懸念した。道其の衝にあたつたり。w・cへ通りがりに、上から蔽かぶさるやうに來た時は、角のあるだけ、青鬼の方がましたと思つた。

アツといつて、むつくと起き、外套を頭から、硝子戸へひつたりと顔をつけた。——此だと、暗夜の野も山も、朦朧として孤家の灯も透いて見へる。……一つお覺え遊ばしても、年内の御重寶。

外套の裡から小さな聲で、

「……返つたかい。」

「もう、前刻。」

私は耳まで壓へて居た。

鱒の沼津をやがて過ぎて、富士驛で、人員は、はじめて動いた。

それもとゞ五六人。病人が起つた。あとへ紫がついて下りたのである。……鱒の沼津と言つた。雨ふりだし、まだ眞暗だから遠慮をしたが、こゝで紫の富士驛と言ひたい、

——その若い女が下りた。

さては身延へ参詣をするのであつたか。遙拜しつゝ、私たちは、今さらながら其の二人を、涙ぐましく見送つた。紫は一度宙で消えつゝ、橋を越えた改札口へ、ならんで入道の手を曳くやうにして、微な電燈に映つた姿は、耳かくしも、其のまゝ、さげ髪の、黒髪長く朧たけてさへ見えた。

下山の時の面影は、富士川の清き瀬に、白蓮華の花びらにも似られよとて、切に本腹を祈つたのである。

興津の浪の調が響いた。



湯

ど

う

ふ

昨夜は夜ふかしをした。

今朝……と云ふがお午ごろ、炬燵でうとくして居ると、いつも来て囀る、おてんばや、いたづらツ兒の雀たちは、何處へすツ飛んだか、ひつそりと静まつて、チイ〜と、甘へるやうに、寂しさうに、一羽めじろが鳴いた。

いまが花の頃の、裏邸の枇杷の樹かと思ふが、もつと近い。屋根には居まい。ぢき春戸の小さな椿の樹らしいなと、そつと縁側へ出て立つと、その枇杷の方から、斜にさつと音がして時雨が来た。……

椿の梢には、つひ此のあひだ枯萩の枝を対つて、その時引残した朝顔の蔓に、五つ六つ

白い實をついたのが、冷く、はらくと濡れて行く。

考へても見たが可い、風流人だと、驚を覗くにも行儀があらう。それ鳴いた、障子を明けたのでは、めじろが熟として居やう筈がない。透かしても、何處にもその姿は見えないで、濃い黄に染まつた銀杏の葉が、一枚ひらくと飛ぶのが見えた。

懐手して肩が寒い。

かうした日は、これから寒にも、雪にも、いつもいゝものは湯豆腐だ。——昔からものゝ本にも、人の口にも、音に響いたものである。が、……此の味は、中年からでないと思われない。誰方の見たちでも、小兒で此がすきだと言ふのは餘りなからう。十四五ぐらゐの少年で、僕は湯どうふが可いよ、などは——説明に及ばず——親たちの注意を要する。今日のお茶は豆腐と云へば、二十時分のまづい顔は當然と言つて可い。

能樂師、松本金太郎ぢいさんは、湯どうふはもとより、何うした豆腐も大のすきで、従つて家中が皆嗜んだ。その叔父は十年ばかり前、七十一で故人になつたが、尙ほその以前……

……米が兩に六升でさへ、世の中が騒がしいと言つた、諸物價の安い時、月末、豆腐屋の拂が七圓を越した。……どうも平民は、すぐに勘定にこだはるやうでお恥かしいけれども、何事も此の方が早分りがする。……豆腐一挺の値が、五厘から八厘、一錢、乃至二錢の頃の事である。……食つたな！何うも。……豆腐屋の通帳のあるのは、恐らく松本の家ばかりだらうと言つたものである。いまの長もよく退治る。——お銚子ならまだしもだが、催、稽古など忙しい時だと、ビールで湯どうふで、見るくうちに三挺ぐらゐるべろりと平らげる。當家のは、鍋へ、そのまゝ箸を入れるのではない。ぶつぶつと言ふやつを、椀に裝出して、猪口のしたちで行る。何十年來馴れたもので、つゆ加減も至極だが、しかし、その小兒たちは、皆知らん顔をしてお魚で居る。勿論、そのお父さんも、二十時代には、右同斷だつたのは言ふまでもない。

紅葉先生も、はじめは「豆腐と言文一致は大嫌だ。」と揚言なすつたものである。まだ我

樂多文庫の發刊に成らない以前と思ふ……大學へ通はるゝのに、飯田町の下宿においでの際、下宿の女房さんが豆腐屋を、とうふ屋さんと呼び込む——小さな下宿でよく聞こえる——聲がすると、「媼さん、又豆腐か。そいつを食はせると斬つ了うぞ。」で、豫てこのみの長船の鞘を拂つて、階子段の上を踏鳴らしたと……御自分ではなさかなかつたが、當時のお友だちもよく話すし、おとしよりたちも然う言つて苦笑をされたものである。身體が弱くおなりに成つてからは、「湯豆腐の事だ。……古人は偉い。いゝものを拵へて置いてくれたよ。」と、然うであつた。

あゝ、命日は十月三十日、……その十四五日前であつたと思ふ。……お二階の病床を、久しぶりで、下階の八疊の縁さきて。風冷かな秋晴に、湯どうふをあがりながら、「おい、そこいらに糞虫が居るだらう。……見な。」「はッ。」と言つた、昨夜のお夜伽から續いて傍に居た、私は、いきなり、庭へ飛出したが、一寸廣い庭だし、樹もいろ／＼ある。葉もまだ落ちない。形は何處か、影も見えない。豫て氣短なのは知つて居る。特に御病氣。何か

のお慰に成らうものを、早く、と思ふが見當らない。糞虫戀しく途に迷つた。「其處に居る、……其の百日紅の左の枝だ。」上野の東照宮の石段から、不忍の池を遙に、大學の大時計の針が分明に見えた瞳である。かゝる時にも鏡かつた。

まつげばかりに附着いて、小さな枯葉をかぶりながら、あの糞虫は掛つて居た。そつとつまんで、葉をそのまゝ、ごそりと掌に据ゑて行くと、箸を片手に、おもやせたのが御覽なすつて、「ゆふべは夜中から、よく鳴いて居たよ——ちゝ、ちゝ——と……秋は寂しいな——よし、其方へやつときな。……殺すなよ。」小栗も傍から手をついて差覗いた。「はい、葉の上へ乗せて置きます。」軽く頷いて、先生が、「お前たち、銚子をかへな。」……ちゝ、ちゝ、はゝのなきあとに、ひとへにたのみ參らする、その先生の御壽命が。……玄關番から私には幼馴染と云つてもいゝ柿の木の下に飛石づたひに、うしろ向きに、袖はそのまゝ、糞虫の糞の思がしたのであつた。

たゞし、その頃は、まだ湯豆腐の味は分らなかつた。眞北には、此の湯豆腐、たのしみ

鍋、あをやぎなど言ふ名物があり、名所がある。辰巳の方には、ばか鍋、蛤鍋など言ふ逸物、一類があると聞く。が、一向に場所も方角も分らない。内證でその道の達者にたゞすと、曰く、鍋で一杯やるくらゐの餘裕があれば、土手を大門とやらへ引返す。第一歸りはしない、と言つた。格言ださうである。皆若かつた。いづれも二十代の事だから、湯どろふで腹はくちく成らぬ。餅の大切なるま汁粉、それも一せん、おかはりなし。……然らざればかけ一杯で、蕎麥湯をだぶくとおかはりをするのださうであつた。

洒落れた湯どうふにもあはれなのがある。私の知りあひに、御旅館とは表看板、實は安下宿に居るのがあつたが、秋のながあめ、陽氣は悪し、いやな病氣が流行ると言ふのに、膳に小鯛の焼いたのや、生のまゝ豆腐をつける。……そんな不料簡なのは冷やつことは言はせない、生の豆腐だ。見てもふるへ上るのだが、食はずには居られない。ブリキの鐵瓶に入れて、ゴトリくと煮て、いや、うで、そつと醬油でなくぐしに舐めると言ふ。――慙う成つては、湯豆腐も慘憺たるものである。……

……など言ふ、私だつて、湯豆腐を本式に味ひ得る意氣なのではない。一體、これには、きざみ葱、とうがらし、大根おろしと言ふ、千裁のつはものゝ立派な加勢が要るのだけれど、どれも生だから私はこまる。……その上、式の如く、だし昆布を鍋の底へ敷いたのでは、火を強くしても、何うも煮えがおそい。ともすると、ちよろ／＼、ちよろ／＼と草の清水が湧くやうだから、豆腐を下へ、あたまから昆布を被せる。即ち、ぐらくと煮えて、蝦夷の雪が板昆布をかぶつて踊を踊るやうな處を、ひよいと挟んで、はねを飛ばして、あつと慌て、ふツと吹いて、するりと頬張る。人が見たらをかしからうし、おきゝになつても馬鹿々々しい。

が、身がつてゐはない。味はとにかく、ものゝ生ぬるいよりは此の方が増だ。

時々、婦人の雑誌の、お料理方を覗くと、然るべき研究もして、その道では、一端、慢らしいのゝ投書がある。たとへば、豚の肉を細くたゝいて、摺鉢であたつて、ひしやくで掬つて、掌へのせて、だんごにまるめて、うどん粉をなすつて、それから捏ねて……あゝ、

待つて下さい、もしく……その手は洗つてありますか、爪はのびて居ませんか、爪のあかはありませんか、とひもじい腹でも言ひたく成る、のが澤山ある。

浅草の一女として、——内ぢやあ、うどんの玉をかつて、油揚とねぎを刻んで、一所にぐらく煮て、ふつくとふいて食べます、あつい處がいゝのです。——何を隠さう、私は此には岡惚をした。

いや、色氣どころか、ほんとうに北山だ。……湯どうふだ。が、家内の財布じりに當つて見て、安直な鯛があれば、……魴鮓でもいゝ、……希くば菽乳羹にしたい。

しぐれは、いまのまに留んで、薄日がさす……楓の小枝に残つた、五葉ばかり、もみぢ

のぬれ色は美しい。こぼれて散るのは惜い。手を伸ばせば、狭い庭ですぐ届く。

本箱をさがして、紫のおん姉君の、第七帖を出すのも仰々しからう。……炬燵を迂つてあるきさうな、膝栗毛の續、木曾街道の寢覺のあたりに一寸はさんで。……

二三羽—十二三羽

引越しをする毎に、「雀は何うしたらう。」もう八十幾つで、耳が遠かつた。——その耳を熟と澄ますやうにして、目をうつとりと空を視めて、火桶にちよこんと小さく居て、「雀は何うしたらうの。」引越しをする毎に、祖母の然う呟いたことを覚えて居る。「祖母さん、一所に越して來ますよ。」當てづつばに氣安めを言ふと、「おゝ、然うかの。」と目皺を深く、ほくほくと頷いた。

其のなくなつた祖母は、いつも佛の御飯の残りだの、洗ひながしのお飯粒を、小窓に載せて雀を可愛がつて居たのである。

私たちの一向に氣のない事は——はれて雀のものがたり——そらで嵐雪の句は知つて居



ても、今朝も囀つた、と心に留めるほどではなかつた。が、少からず愛惜の念を生じたのは、おなじ麴町だが、土手三番町に住つた頃であつた。春も深く、やがて梅雨も近かつた……庭に柿の老樹が一株。遺放しに手入れをしないから、根まはり雑草の生た飛石の上を、ちよこくとよりは、ふよくと雀が一羽、羽を擴げながら歩行いて居た。家内がつかくと跣足で下りた。いけずな女で、確に小雀と認めたらしい。チチチチ、チュ、チュツ、すぐに掌の中に入つた。引摺んぢや不可い、そつとく。此が驚か、かなりやだと、傳統的にも世間體にも、それ鳥籠をと、内にはないから買ひに出る處だけれど、對手が、のりを舐める代もので、お安く扱はれつけて居るのだから、臺所の目筈で其の南の縁へ先づ伏せた。——處で、生捉つて籠に入れると、一時も経たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のやうに早く人馴れをするのではない。雀の兒は容易く餌につかぬと、祖母にも聞いて知つて居たから、此のまだ草にふらついて、飛べもしない、ひよわなものを、飢えさしては成らない。——屹と親雀が来て餌を飼はう。

それには、縁では可恐がるだらう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥は直ぐに来て飛びついた。もう前刻から庭樹の間を、けたましく鳴きながら、彼方へ飛び、此方へ飛び、飛騨いでゐたのであるから。

障子を開けたまゝで覗いて居るのに、仔の可愛さには、邪慳な人間に對する恐怖も忘れて、目筈の周圍を二三尺、はらくくると廻つて飛ぶ。ツ、と筈の目へ嘴を入れたり颯と引いて横に飛んだり、飛びながら上へ舞立つたり。其のたびに、筈の中の仔雀のあこがれやうと言つたらぬ。あの聲がキイと聞こえるばかり鳴き絶つて、引切れそうに胸毛を震はす。利かぬ羽を渦にして抱きつかうとするのはおつかさんが、嘴を筈の目に、その……ツ、と入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな餌を、虫らしい餌を、親は嘴に啣へて居るのである。筈の中のは、乳離れをせぬ嬰兒だ。火のつくやうに泣立てるのは道理である。處で筈の目を潜らして、口から口へ哺めるのは——人間の方でも其の計略だつたのだから——いとも容易い。

だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつゝ身を引いて飛廻るのは、あまり惻愴でない人間にも的確に解せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うまくくをあげましやう、其處を出ておいで。」と言ふのである。他の手に封じられた、仔は何うして、自分で策が抜けられやう？ 親は何うして、自分で策を開けられやう？ 其の思は何うだらう。

私たちは、しみくしく可愛く成つたのである。

石も、折箱の蓋も匆飛ばして、策を開けた。「御免よ。」御免なさいよ。」と雀の方より、此方が顔を見合はせて、悄気けつゝ座敷へ引込んだ。

少々極が悪くつて、しばらく、背戸へ顔を出さなかつた。

庭下駄を揃へてあるほどの所帯ではない。玄關の下駄を引抓んで、晩方背戸へ出て、櫛の梢の一つ星を見ながら、「あの、雀は何うしたらう。」ありたけの飛石——と言つても五つばかり——を漫に渡ると、濡けた窪地で、すぐ上が葱や苔、龍の髯の石垣の崖に成る。片隅に山吹があつて、こんもりした躑躅が並んで植つて居て、垣どなりの灯が、ちらく

と透くほどに二三輪咲残つた……その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一羽、たよりなげに宿つて居た。正に前刻の仔に違ひない。……様子が、土から僅か二尺ばかりこれより上へは立てないので、こゝまで連れて来た女親が、わりなう預けて行つたものらしい……敢て預けて行つたと言ひたい。悪戯を佯びた私たちの心を汲んだ親雀の氣の優しさよ。……その親たちの噂は何處？……この嬰兒ちゃんは寂しさうだ。

土手の松へは夜鷹が来る。筑士の森では木菟が鳴く。……折から宵月の頃であつた。親雀は、可恐いもの目に觸れないやうに、成るだけ、葉の暗い中に隠したに違ひない。もとより薬屑も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼつと、その仔雀の身に添つて、霞のやうな氣が籠つて、包んで圓く明かつたのは、親の情の臚氣ならず、輪光を顯はした影であらう。「一寸。」何さ。「手招ぎをして、来て見なよ。」家内を呼出して、兩方から、そつと、顔を差寄せると、じつとしたのが、微に黄色な嘴を傾けた。この柔な胸毛の色は、さし覗いたものゝ襟よりも白かつた。

夜ふかしは何、家業のやうだから、その夜はやがてあくまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば届く、低い枝に、預かつたからである。

朝寝はしたし、ものに紛れた。午の庭に、隅なき五月の日の光を浴びて、黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑躅、山吹の上下を、二羽縦横に飛んで舞つて居る。ひらく、ちらく、と羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習ふ、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由に軽く成つて、卵の花垣の丈を切るのが、四五度馴れると見るうちに、崖をなぞへに、上町の樹の茂りの中へ飛んで見えなく成つた。

真綿を黄に染めたやうな、あの翼が、怎う速に飛ぶのに馴れるか。且つ感じつゝ、私たちは飽かずに視めた。

あとで、臺所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、行つたり、來たり、出入りするの、五六羽、八九羽、どれが、その親と仔の二羽だけは紛れて知れない。

——二三羽、五六羽、十羽、十二三羽。こゝで雀たちの數を言つた次手に、それ／＼の道の、學者方までもない、一寸わけ知りの御人に伺ひたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では餘り澤山には殖えないものなのであらうか知ら？御存じの通り、稻塚、稻田、粟黍の實る時は、平家の大軍を走らした水鳥ほどの羽音を立て、暇行き、畔行くものを驚かす、夥多しい群團を爲す。鳴子も引板も、半ば——此がための備だと思ふ。むかしのもの語にも、年月の経る間には、おなじ背戸に、孫も彦も群る筈だし、第一椋鳥と鳩を賭けて戦ふ時の、雀の軍勢を思ひたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些と家族が榮えようと思ふのに、十年一日と言ふが、實際、——その土手三番町を、やがて、いまの家へ越してから十四五年になる。——あの時、雀の親子の情に、いとしさを知つて以來、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、

お飯粒の少々は毎日缺がさず撒いて置く。たとへば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」だけは、留主へ言つて置く、らゐのだが、さて、何年にも、一寸来て二羽三羽、五六羽、總勢すぐつて十二三羽より數が殖えない。長者でもない癖に、俵で扶持をしないからだ、言はれ、ば其までだけれど、何、私だつて、もう十羽殖えたぐらゐは、それだけ御馳走を増すつもりで居るのに。

何も、雀に托けて身代の伸びない愚痴を言ふのではない。又……別に雀の數の多く成る事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見へて五六羽づゝは親の連れて來る子の殖えるのが分つて居るから、いつも同じほどの數なのは何處へ行つて、何うするのだらうと思ふからである。

が、何うも様子が、仔雀が一羽だちの出來るのを待つて、その小兒だけを宿に残して、親雀は塙をかへるらしく思はれる。

あの、仔雀が、チイ〜と、ありつたけ、嘴を赤く開けて、クリスマスに貰つたマント

のやうに小羽を動かし、胸毛をふよふよと搖がせて、恚う仰向いて強情ると、あいよ、と言つた顔色で、チチツ、チチツと幾度もお飯粒を嘴から含めて遣る。……食べても強情る。ふくめつゝ、後ねだりをするのを機掛に、一粒啣へて、お母さんは塙の上——（梅の枝下で爰にお飯が置いてある）——其處から、裏露路を切つて、向ふの瓦屋根へフツと飛ぶ。とあとから仔雀がふわりと縋る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢の高さぐらゐに舞上ると、その胸のあたりへ附着くやうに仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞ひつゝ、飛びつゝ、庭中を翔廻りなどもする。矢張り羽を馴らすらしい。此の舞踏が一齋に三組も四組もはじまる事がある。卵の花を搔亂し、萩の花を散らして狂ふ。……かあいゝのに目がないから、春も秋も一所だが、晴の遊戯だ。もう些と、綺麗な窓掛、絨氈を飾つても遣りたいが、庭が狭いから、羽とゝもに散りこぼれる風情の花は澤山ない。却つて羽について來るか、嘴から落すか、植えない葦の紫が一本咲いたり、蓼が穂を紅らめる。

處で、何のなかでも、親は甘いもの、仔はづるく甘ツたれるもので。……あの胸毛の白  
 いのが、見て居ると、そのうちに立派に自分で餌が拾へるやうになる。澄ました面で、コ  
 ツンなど、高慢に食べて居る。いたづらものが、二三羽、親の目を抜いで飛んで来て、チ  
 ユチュツチュツと、つき合の喧嘩さへ遣る。生意氣にも係らず、親雀がスーツと来て  
 叱るやうな顔を見ると、喧嘩の嘴も、生意氣な羽も、忽ちぐにやくと成つて、チイチ  
 イ、赤坊聲で甘つたれて、餌を頂戴と、口を張開いて胸毛をふわくとして待構へる。  
 チチツ、チチツ、一人で食べなと言つても肯かない。頬邊を横に振つても肯かない。で、  
 チイ／＼チイ……おなかと空いたの……お、よち／＼と言つた具合に、此の親馬鹿が、  
 すぐにのろく成つて、お飯粒の白い處を——贅澤な奴等で、内のは挽割麥を交ぜるのだが  
 餘程腹がすかないと麥の方へは嘴をつけぬ。此奴等、大地震の時は弱つたぞ——喙んで、  
 嘴で、仔の口へ、押込み採込むやうにするのが、凡そ堪らないと言つた形で、頬摺りをす  
 るやうに見える。

怪しからず、親に苦勞を掛ける。……その癖、他愛のないもので、陽氣がよくて、お腹  
 がくちいと、うとくと成つて居睡をする。……さあ／＼一きり露臺へ出ようか、で、塚の  
 上から、揃つてももの干へ出たとお思ひなさい。日のほかくと一面に當る中に、聲は噪ぎ、  
 影は踊る。

すてきに物干が賑だから、密と寄つて、隅の本箱の横、二階裏の脇掛窓から、まぶし  
 い目をばちくりと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上の小廂からも、暖な影を  
 湧かし、羽を光らして、一齋にバツと遁げた。——飛ぶのは早い、裏邸の大枇杷の樹まで  
 さしわたし五十間ばかりを隣り間もない。——（此の枇杷の樹が、馴染の一家族の樹な  
 で、前通りの五本ばかりの櫻の樹（有鳥家）にも一群落を食つて居るのであるが、その組  
 は私の内へは來ないらしい、持場が違ふと見える）——時に、女中がいけぞんざいに、取  
 込む時引外したまゝの掛棹が、斜違ひに落ちて居た。硝子一重すぐ鼻の前に、一羽可愛い  
 のが眞正面に、ぼかんと留まつて残つて居る。——どうかして、座敷へ飛込むで戸惑ひす

るのを掴へると、掌で暴れるから、此のくらゐ、しみんぐと雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一づゝ日光を吸込んで、おゝ、お前さんは館で出来て居るのではないかい、と言ひたいほど、とろんとして、目を眠つて居る。道理こそ、人の目と、其の嘴と打撞りさうなのに驚きもしない、と見るうちに、踏へて留つた小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて迂りかゝると、その時はビクリと居直る。……煩つて動けないか、怪我をして居ないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住つた時（三太郎）と名づけて目白鳥が居た。櫻山に生れたのを、をとりで捕つた人に貰つたのであつた。が、何處の巢に居て覺えたらう、鴨、駒鳥、あの邊にはよく居る頬白、何でも囀る……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明かに鶯の聲を鳴いた。目白鳥としては駄鳥か何うかは知らないが、私には大の、ご秘藏——長屋の破軒に、水を飲ませて、芋で飼つたのだから、笑つて故と（おん）

の字をつけておく——またよく馴れて、殿様が鷹を据えた格で、掌に置いて、それと見せると、パツと飛んで虫を退治た。また、冬の日のわびしさに、紅梅の花を炬燵へ乗せて、籠を開けると、花を被つて、蜜を吸ひつゝ、嘴を眞黄色にして、掛布團の上を押廻つた。三味線を弾いて聞かせると、音に競つて軒で高鳴りする。寂い日に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。……可愛いにつけて、断じて籠には置くない。秋雨のしよぼくと降るさみしい日、無事なようにと願ひ申して、岩殿寺の觀音の山へ放した時は、煩つて居た家内と二人、悄然として、ツイーツイー、と梢を低く坂下りに樹を傳つて慕ひ寄る聲を聞いて、ほろりとして、一人は袖を濡らして歸つた。が——其の目白鳥の事で。……（寒い風だよ、ちよぼ一風は、しはりごはりと吹いて来る）と田越村一番の若衆が、泣聲を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風の烈い夕暮に、いそがしいのと、寒いのに、向ふみずに、がたりと、門の戸をしめた勢で、軒に釣つた鳥籠をぐわたり、ボタンと加返した。アツと思ふと、中の目白鳥は、羽ばたきもせず、横木を轉

げて、落葉の挟つたやうに落ちて縮んで居る。「しまった、……三太郎が目をまはした。」まあ、大變ね。」と襷掛けのまゝ庖丁を、投げ出して、目白鳥を掌に取つて据ゑた婦は目一杯涙を溜めて、「何うしましやう。其、其の時だ。試に手水鉢の水を柄杓で切つて雲にして、露にして、目白鳥の嘴を開けて含まして、襟をあげて、膚につけて暖めて、しばらくすると、ひく／＼と動き出した。あゝ助りました。御利益と、岩殿の方へ籠を開いて、中へ入ると、あはれや、横木へつかまり得ない。おつこちるのが可憐いのか、隅の、隅の、狭い處に小さく成つた。あくる日一日は、些と、ご腦氣と言つた形で、摺餅に嘴のあとを、ほんの筋ほどつけたばかり。但し完全に蘇生つた。

此の經驗がある。

水でも飲まして遣りたいと、障子を開けると、其の音に、怪我處か、わんぱくに、しかも二つばかり廻つて飛んだ。仔雀は、うとり／＼と坐睡をして居たのであつた。……憎くない。

最もなか／＼の悪戯もので、逗子の三太郎……其の目白鳥が——お茶の子だから雀の口眞似をした所爲でもあるまいが、日南の縁に出して人の居ない時は、籠のまはりが雀どもの足跡だらけ。秋晴の或日、裏庭の茅葺小屋の風呂の柄へ、向ふへ櫻山を見せて掛けて置くと、午少し前の、いゝ天気で、閑な折から、雀が一羽、……丁ど目白鳥の上の廂合の樋竹の中へすぼりと入つて、ちよつと黒い頭だけ出して、上から籠を覗込む。嘴に小さな芋虫を一つ啣へ、あつち向いて、こつち向いて、ひよい／＼と見せびらかすと、籠の中は、戀人から來た玉章ほどに欲しがつて驅上り飛上つて取らうとすると、ひよいと面を横にして、また、ちよい／＼と見せびらかす。いや、いけずなお轉婆で。……處がはづみに掛つて振つた拍子に、その芋虫をボタリと籠の目へ、落したから可笑い。目白鳥は澄まして、ペロリと退治た。吃驚仰天した顔をしたが、ぼんと樋の口を突出されたやうに飛んだもの。

瓢箪に宿る山雀、と言ふ謡がある。雀は樋の中がすきらしい。五六羽、また、七八羽、

横にづらりと並んで、顔を出して居るのが常である。

或殿が領分巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床几を据えると、背戸畑の梅の枝に、大な瓢箪が釣してある。梅見と言ふ時節でない。

「これよ、……あの、瓢箪は何に致すのぢやな。」

その農家の親仁が、

「へい、山雀の宿にござります。」

「あゝ、風情なものぢやの。」

能の狂言の小舞の謡に。

いたいけしたるものあり。張子の顔や、練稚兒。しゆくしや結びに、さゝ結び、やましな結びに風車。瓢箪に宿る山雀、胡桃にふける友鳥……

「いまはじめて相分つた。——些少ぢやが餌の料を取らせやう。」  
小春の麗な話がある。

御前のお目にとまつた、謡のまゝの山雀は、瓢箪を宿とする。此方人等の雀は、棟割長屋で、樋竹の相借家だ。

腹が空くと、電信の針がねに一座づらりと出て、ぼち／＼ぼちと中空高く順に並ぶ。中でも音頭取が、電柱の頂邊に一羽留つて、チイと鳴く。これを合圖に、一齋にチイと鳴出す。——塀と枇杷の樹の間に當つて。で御飯をくれろと、催促をするのである。私が即ち取次いで、

「催促てるよ、／＼。」

「せわしないのね。……煩いよ。」

など、言ひながら、茶碗に裝つて、婦たちは露地へ廻る。此が此のうへ後れると、勇悍なのが一羽押寄せる。馬に乗つた勢で、小庭を縁側へ飛上つて、ちよん、ちよん、ちよん／＼と、雀あるきに扉を抜けて臺所へ入つて、お寵の前を廻るかと思ふと、上の引窓へバツと飛ぶ。



「些と自分でもお働き。虫を取るんだよ。」

何も、肯分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中はすらく、葉の上はすらく……あの撓々とした細い枝へ、堀の上、椿の樹からトンと下りると、下りたなりにすつと迂つて、一寸末を餘して垂下る。すぐに、くるりと腹を見せて、葉裏を潜つてひよいと攀ぢると、また一羽が、おなじやうに堀の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に撓つて、ぶら下るかと思ふと、翩然と傳ふ。又一羽が待兼ねてトンと下りる。一株の萩を、五六羽で、ゆさく／＼揺つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で啣へたり、尾で刎ねたり、横顔で覗いたり、悠くして、裏おもて、虫を漁りつゝ、滑稽けて、はづんで、ストーンと落るか、と、すると羽をひらく／＼と宙へ踊つて、小枝の尖へひよいと乗る。

水上さんが此を聞いて、莞爾して勸めた。

「鞆を拵へてお遣んなさい。」

邸の庭が広いから、直ぐにこゝへ氣がついた。私たちは思ひも寄らなかつた。糸で杉箸

を結へて、其の萩の枝に釣つた。……此の趣を乗氣で饒舌ると、雀の興行をするやうだから見合はせる。が、鞆に乗つて、飄箆ぶつくりこ、なぞは何でもない。時とすると、堀の上に、いま睦じく二羽喰んで居たと思ふ。その一羽が、忽然として姿を隠す。飛びもしないのに、おやく／＼と人間の目にも隠れるのを、……恚う捜すと、いま居た堀の笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むやうにして縦に附着いて居るのである。脚が／＼りもないのに巧なもので。——然うすると、見失つた友の一羽が、怪訝な様子で、チ、と鳴き／＼、其處らを覗くが、その笠木の一寸した出張りの咽に、頭が附着いて居るのだから、どつちを覗いても、上からでは目に附かない。チチツ、チチツと少時捜して、パツと枇杷の樹へ飛んで歸ると、そのあとで、密と頭を半分出して、きよろ／＼と見ながら、嬉しさうに、羽を揺つて後から颯と飛で行く。……惟ふに、人の子のするかくれんぼである。

さて、恚うたあいもない事を言つて居るうちに——前刻言つた——仔どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出来るやうに成ると、胸毛の白いのばかりを残して、親雀は何處

へ飛ぶのか居なく成る。数は増しもせず、減りもせず、同じく十五六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が實に成り、雀の咽が黒く成る。年々二三度おんなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩また椿、朝顔の花、露草などは、枝にも蔓にも馴れ馴染んで居るらしい……と言ふよりは、親雀から教へられて居るらしい。——が、見馴れぬものが少しでもあると、可憐がつて近づかぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退いて居る。最も、時には此方から、故とおいでの際を御免蒙る事がある。物干へ蒲團を干す時である。お嬢さん、坊ちゃんたち、一家揃つて、いゝ心持に成つて、ふつくりと、蒲團に團扇を試みるのだから堪らない。ほと／＼と、あとが、ふんだらけ。此には弱る。其處で工夫をして、他所から頂戴して貯へて居る豹の皮を釣つて置く。と枇杷の宿に居すくまつて、裏屋根へ来るのさへ、おつかなびつくり、(坊主びつくり紹の皮)だから面白い。

が、一夏縁日で、月見草を買つて来て、萩の傍へ植えた事がある。夕月に、あの花が露

を香ばせてはツと咲くと、いつも此の黄昏には、一時留り餌に騒ぐのに、ひそまり返つて一羽だつて飛んで来ない。はじめは怪しんだが、二日め三日めには心着いた。意久地なし、臆病の鳥瓜、夕顔などは分けても知己だらうのに、はじめて咲いた月見草の黄色な花が可憐いらしい……可哀相だから植替へやうかと、言ふうちに、四日めの夕暮頃から、漸つと出て来た。何、一度味をしめると、食つて露も吸ひかねぬ。

まだある。土手三番町の事を言つた時、卵の花垣をなど、少々調子に乗つたやうだけれど、まつたく其の庭に咲いて居た。土地では珍しいから、引越す時一枝折つて来てさし芽にしたのが、次第に丈たかく生立ちはしたが、葉ばかり茂つて、蕾を持たない。丁ど十年目に、一昨年卯月の末にはじめて咲いた、それも塙を高く越した日當のいゝ一枝だけ眞白に咲くと、其の朝から雀がバツタリ。意久地なし。また丁ど其の卵の花の枝の下に御飯が乗つて居る。前年の月見草で心得て、此の時は澄まして居た。やがて一羽づゝ密と来た、忽ち卵の花に遊ぶこと萩に戯るゝが如しである。花の白いのにさへ怯えるのである

から、雪の降つた朝の臆病思ふべしで、枇杷塚と言ひたい、むかうの眞白の木の丘に埋れて、聲さへ立てないで可哀である。

椿の葉を拂つても、飛石の上を搔分けても、物干に雪の溶けかゝつた處へ餌を見せても影を見せない。炎天、日盛の電車道には、焦げるやうな砂を浴びて、螻蛄の斧と言つた強いのが普通なのに、此はどうしたものであらう。……はじめ、こゝへ引越したてに、一二年居た雀は、雪なんぞは驚かなかつた。山を兎が飛ぶやうに、雪を糞にして、吹雪を散らして翔けたものを――

こゝで思ふ。其の兒、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、追續ぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに對する、親雀の申しふくめが消えるのであらうと思ふ。

泰西の諸國にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の掌にも帽子にも遊ぶと聞く。

何故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさへ恐るゝのであらう、實に花なればこそ、些とでも變つた人間の顔には、渠等は大なる用心をしなければならぬ。不意の蝶の戸に當る事幾度ぞ。思ひも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは數々である。牛乳屋が露路へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今日は」を叫べば遁げ、大工が來たと見ればすくみ、屋根屋が來ればひそみ、疊屋が來ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道に何某は雀うちの老手である。並木づたひに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの、約一千を下らないと言ふのを見て戦慄した。

空氣銃を取つて、日曜の朝、こゝの露地口に立つ、狩獵服の若い紳士たちは、失禮ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、隣家の少年が空氣銃を求め得て高く捧げて歩行いた。隣家の少年では防ぎ難い。おつかひものは、たゞ煎餅の袋だけれども、雀のために、うちの小母さんが折入つて頼んだ。

親たちが笑つて、

「お宅の雀を狙へば、銃を没取すると言ふ約條済みです。」

嘗て、北越、俱利伽羅を汽車で通つた時、峠の驛の屋根に、車のとどろくにも驚かず。雀の日光に浴しつゝ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲残つた撫子にも、火牛の修羅の巻を忘れた。——古戦場を忘れたのが可いのではない、忘れさせたのが雀なのである。

モウパッサンが普佛戦争を題材にした一篇の讀みだしは、「巴里は包圍されて餓えつゝ悶えて居る。屋根の上に雀も少くなり、下水の埃も少くなつた。」と言ふのではなかつたか。

雪の時は——見馴れぬ花の、それとは違つて、天地を包む雪であるから、もし此に恐れたと成ると、雀のためには、大地震以上の天變である。東京のは早く消えるから可いものゝ五日十日積るのには何うするだらう。半歳雪に埋もるゝ國もある。

或時も、また雪のために一日形を見せないから、……眞個の事だが案じて居ると、次の朝の事である。ツイ——と寂しさうに鳴いて、目白鳥が唯一羽、雪を被いで、紅に咲いた一輪、寒椿の花に来て、ちらりと羽も尾も白くしながら枝を潜つた。

炬燵から見て居ると、しばらくすると、雀が一羽、パツと来て、おなじ枝に、花の上下を、一所に廻つた。續いて三羽五羽、一齋に皆來た。御飯はすぐ嘴の下にある。パツ、パ、チイ〜、諸きほひに歡喜の聲を上げて、踊りながら、飛びながら、啄むと、今度は目白鳥が中へ交つた。雀同志は、突合つて、先を争つて狂つても、その目白鳥には、おとなしく優しくかつた。そして目白鳥は、欲しさうに、不思議さうに、雀の飯を視めて居た。

私は何故か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれやう。——親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教へられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。

それにつけても、親雀は何處へ行く。——

——去年七月の末であつた。……餘り暑いので、愚に返つて、愆う何うも、おゝ暑いであつては不可い。小兒の時は、日盛に蜻蛉を釣つたと、炎天に打つかる氣で、そのまゝ日盛を散歩した。

その氣の次手に、……何となく、其處等屋敷町の垣根を捜して（ごんくごま）が見たかつたのである。此の名からして小兒で可い。——私は大好きだ。スゞメノエンドウ、スゞメウリ、スゞメノヒエ、姫百合、姫萩、姫紫苑、姫菊の蔦たけた稱に對して、スゞメの名のつく一列の雜草の中に、此のごんくごまを、私はひそかに「スゞメの蠟燭」と稱して、内々最良で居る。

分けて、孟蘭盆のその月は、慕詣の田舎道、寺つゞきの草垣に、線香を片手に、此のスゞメの蠟燭、ごんくごまを摘んだ思出の可懐さがある。

然も其の癖、卑怯にも片陰を拾ひく、小さな社の境内だの、心當りの、邸の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかはつたのが多い。——清水谷の奥まで掃除が届く。——梅雨の頃は、闇黒に月の影がさしたほど、彼方此方に目に着いた紫陽花も、此の二三年こつち最もふ少い。——荷車のあとには芽ぐんでも、自動車の轍の下には生えまいから、いまは車前草さへ直ぐには見やうたつて間に合はない。

で、何處でも、あの、珊瑚を木乃伊にしたやうな、ごんくごまは見當らなかつた。——ないものねだりで、尙ほ欲しい。——歩行くうちに汗を流した。

場所と言ふまいが、向ふに森が見えて、樹の茂つた坂がある。……私が覺えてからも、むかし道中の茶屋族記のやうな、中庭を行抜けに、土間へ腰を掛けさせる天歎羅茶漬の店があつた。——その坂を下りかゝる片側に、坂なりに落込んだ空溝の廣いのがあつて、道には破朽ちた柵が結つてある。其の空溝を隔てた、葎を其のまゝ斜違ひに下る藪垣を、むかう裏から這つて、茂つて、またたとへば、瑪瑙で刻んだ、さゝ蟹のやうなスゞメの蠟燭が見

つかつた。

三一六

つかまへて支へて、乗出しても、溝に隔てられて手が届かなかつた。

杖の柄で搔寄せやうとするが、迂る。——がさくくと遣つて居ると、目の下の枝折戸つぶり漢が仰向いて出た。きびらの洗ひさらし、漆紋の兀げたのを被たが、肥つて太いから、手足も腹もぬつと露出て、ちやんくを被つたやうに見える、遅ましい肥大漢の柄に似合はず、おだやかな、柔和な聲して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾つてあげましようかな。」

と言つた。四十ぐらゐの年配である。

私は一應挨拶をして、わけを言はなければ成らなかつた。

「は、あ、ごんくごま。……お薬用か、何か厭禁にでもなりますので？」  
とに角、路傍だし、埃がして居る。裏の崖境には、清淨なのが澤山あるから、御休息か

たぐいで、ものゝ言ひぶりと、人のいゝ顔色が、氣も置かせなければ、遠慮もさせなかつた。

「丁ど午睡時、徒然で居ります。」

導かるゝまゝ、折戸を入ると、そんなに廣いと言ふではないが、谷間の一軒家と言つた形で、三方が高臺の森、林に包まれた、ゆつくりした荒れた庭で、むかふに座敷の縁が涼しく、油蟬の中に閑寂に見えた。私は一寸其處へ掛けて、會釋で済ますつもりだつたが、古疊で暑くるしい、せめてのおもてなしと、竹のづんど切の花活を持つて、庭へ出直すと臺所の前あたり、井戸があつて、勿釣瓶の、釣瓶が、虚空へ飛んで猿のやうに刎ねて居た。傍に青芒が一叢生茂り、桔梗の早咲の孔が二三輪、たゞ初々しく咲いたのを、苔と一枝、三筋ばかり青芒を取添へて、竹筒に挿して、のつしりとした腰つきで、井戸から勿釣瓶でさぶりと汲上げ、片手の水差に汲んで、桔梗に灌いで、胸はだかりに提げた處は、腹まで毛だらけだつたが、床へ据えて、圓い手で、枝ぶりを一寸撓めた形は、悠暢として、そして

三一七

軽い手際で、きちんと極つた。掛ものも何も見えぬ。が、唯その桔梗の一輪が紫の星の照らすやうに据つたのである。此の待遇のために、私は、縁を、座敷へ進まなければならなかつた。

「煎茶を一つ献じましょう。何事も御覽の通りの佗住居で。……あの、茶道具を、これへな。」

と言ふと、次の間の——崖の草のすぐ覗く——竹簀子の濡縁に、むかふむきに端居して……いま私の入つた時、一度ていねいに、お時誼をしたまゝ、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなもの、年紀ごろで視て勿論お手玉ではない、糠袋か何ぞ、せつせと縫つて居た。……島田鬚の艶々しい、きやしやな、色白な女が立つて手傳つて、——肥大漢と二人して、やがて昆爐を縁側へ。……焚つけを入れて、炭を繼いで、土瓶を掛けて、茶盆を並べて、それから、扇子ではたくくと昆爐の火口を煽ぎはじめた。

「あれに澤山ございます、あの、茂りました處に。」

「瀧でも落ちさうな崖です——こんな町中に、あらうとは思はれません。御閑静で實に結構です。霧が湧いたやうに見えますのは。」

「烏爪でございます。下闇で暗がりでありますから、日中から、一杯咲きます。——あすこに、いくらでも、ごんくごまがございませうな。貴方は何とかおつしやいましたな、スゞメの蠟燭。」

これよりして、私は、茶の煮える間と言ふもの、およそ此の編に記した雀の可愛さを爰で話したのである。時々微笑んでは振向いて聞く。娘か、若い妻か、或は妾か。世に美しい女の状に、一つはうかく誘はれて、氣の發奮むだ事は言ふまでもない。

さて幾度か、茶をかへた。

「これを御縁に。」

「勿論かさねまして、頃日に。——では、失禮。」

「あゝ、しばらく。……これは、貴方、おめしものが。」

……心着くと、おめしものも氣恥しい、浴衣だが、うしろの縫めが、しかも、したゝか  
綻びて居たのである。

「こゝもとは茅屋でも、田舎道ではありませんぢや。尻端折……飛んでもない。……あゝ、あんた、一寸繕つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓齒にスツと  
含まれた。

「あなた……」

「あゝ、これ、紅い糸で縫へるものかな。」

「あれ、——おほゝゝゝ。」

私がつそり突立つた裙へ、女の背筋が絡つたやうに成つて、右に左に、肩を曲くると、  
居勝手が悪く、白い指がちら／＼亂れる。

「恐縮です、何とも何うも。」

「慙う三人と言ふもの附着いたのでは、第一私が此の肥體ぢや。お暑さが堪らんわい。衣  
服をお脱ぎなすつて。……さ、さ、それが早い。——御遠慮があつては成らぬ——が、お  
身に合ひさうな着替はなしぢや。……これは、一つ、亭主が素裸に相成りまじやう。それ  
ならばお心安い。」

きびらを剃いで、すつぱりと脱ぎ放した。番禪の肥大裸體で、

「それ、貴方。……お脱ぎなすつて。」

と毛むくじやらの大胡坐を搔く。

呆氣に取られて立すくむと、

「おゝ、これ、あんた、あんたも衣ものを脱ぎなさい。みな裸體ぢや。然うすればお客人  
の遠慮がなう成る。……はゝゝゝ、それが何より。さ、脱ぎなさいく。」

串戯にしてもと、私は吃驚して、言も出ぬのに、女はすぐに巾狭な帯を解いた。膝へ手



繰ると、袖を両方へ引落して、雪を分けるやうに、するりと脱ぐ。……膚は蔽ふたよりふつくりと肉を置いて、背筋をすんなりと、撫肩して、白い脇を乳が覗いた。それでも、脱ぎかけた浴衣を尙ほ膝に半ば挟んだのを、おつ、と這ふと、あれ、と言ふ間に、亭主がするすると引いて取つた。

「はゝゝは。」

と笑ひながら。

既にして、水紅色の布一重である。

私も脱いだ。汗は垂々と落ちた。が、憚りながら禪は白い。一輪の桔梗の紫の影に映えて、女はうるほへる玉のやうであつた。

その手が糸を曳いて、針をあやつしたのである。

縫へると、帯をしめると、私は胸を折るやうにして、前のめりに木戸口へ驅出した。挨拶は済ましたが、咄嗟のその早さに、でつぶり漢と女は、衣を引掛ける間もなかつたらう

……あの裸體のまゝ、井戸の前を、青すゝきに、白く摺れて、人の姿の怪しい蝶に似て、すつと出た。

その光景は、地獄か、極樂か、覺束ない。

「あなた……雀さんに、よろしく。」

と女が莞爾して言つた。

坂を驅上つて、ほつと呼吸を吐いた。が、しばらく茫然としてゐんだ。——電車の音はあとさきに聞こえながら、方角が分らなかつた。直下の炎天に目さへくらむばかりだつたのである。

時に——目の下の森につゝまれた谷の中から、一セイして、高らかに簫の笛が雲の峯に響いた。

……話の中に、稽古の弟子も歸つたと言つた。——あの主人は、簫を吹くのであるか。……然ういへば、餘りと言へば見馴れない風俗だから、見た目をさへ疑ふけれども、肥大

漢は、はじめから、裸體に成つてまで、烏帽子のやうなものを、チョンと頭にのせて居た。

「奇人だ。」

「いや、……崖下のあの谷には、魔窟があると云ふ。……その種々の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崖くづれがあつて、大分、人が死んだ處だから。」——

と或友だちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲勞には、みめよき女房の面が赤馬の顔に見えたと言ふ、むかし武士の話がある。……霜が枝に咲くやうに、汗——が幻を描いたのかも知れない。が、何故か、私は、……實を言へば、雀の宿にともなはれたやうな思ひがするのである。

かさねてと思ふ、日をかさねて一月にたらず、九月一日のあの大地震であつた。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつゝ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、真夜半かけて案じたが、家に

歸ると、轉げ落ちたまゝ底に水を残して、南天の根に、ひども入らずに残つた手水鉢のふちに、一羽、ちよんと傳つて居て、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗きに行つた。近づく胸は轟いた。が、たゞ焼原であつた。

私は夢かとも思ふ。いや、雀の宿の氣がする。……あの大漢のまる顔に、口元のちよぼんとしたのを思へ。卵の毛で胡粉を刷たやうな女の膚の、どこか、願の下あたりに、黒いあさはなかつたか。うつむいた島田髻の影のやうに——

をかした事は、その時摘んで来たごんごまは、いつ何うしたか定かには覺えないのに、秋雨の草に生えて、塚を傳つて居たのである。

「何うだい、雀。」

知らぬ顔して、何にも言はないで、南天燭の葉に日の當る、小庭に、雀はちよん、ちよ

んと遊んで居る。

大正十三年十二月二十七日印刷  
大正十四年一月十一日發行

定價金貳圓

版權  
所有

番町夜講

著者	泉鏡太郎
發行者	山本美
印刷者	岡崎太吉

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

山本印刷所

發兌

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

改

造社

電話 東京八四〇二番  
高輪四九九三番

1E-5F  
-20

山本有三著	倉田百三著	吉田絃二郎著	厨川白村著	谷崎潤一郎著	高濱虚子著	堺利彦著	長谷川如是閑著
嬰兒殺し	超克	芭蕉	苦悶の象徴	愛すればこそ	改造社隨筆 叢書第四篇 朝の庭	改造社隨筆 叢書第二篇 野外劇の一幕	改造社隨筆 叢書第一篇 犬・猫・人間
改訂版	四十版	十版	五十版	百版	新刊	新刊	新刊
上製 定價 送料 十七圓	上製 定價 送料 二圓二十錢 十九錢	上製 定價 送料 一圓六十錢 十五錢	上製 定價 送料 一圓八十錢 十七錢	上製 定價 送料 一圓六十錢 十五錢	上製 定價 送料 一圓七十錢 十三錢	上製 定價 送料 一圓五十錢 十三錢	上製 定價 送料 一圓八十錢 十三錢

終

